
スティックサイダー

山田スウェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ステイツクサイダー

【Nコード】

N3373W

【作者名】

山田スウェル

【あらすじ】

美少女の形をした空っぽなセックスフレンド、雨宮。美人じゃないけれど生活の面倒を見てくれる成美さん。そして妹という繋がりを永遠にしたがるのが美しくないマキ。

三角形に囲まれた僕の生活が今、壊れようとしている。みんなが不幸せで幸福な結末に向かいながら。

食って寝って食う。僕の生活は三角形。満足していると言えば嘘だけど、耐えられない程の不満は無い。だから幸せかと聞かれたら、不幸じゃないのだと言える。

1 .

よく晴れた日だった。レンタル屋に買った方が安い位の延長料金を支払い、その先で雨宮に会う。雨宮は向かいの百円ショップから出てきて僕を見つけるなり駆け寄って来た。ちなみに僕らは毎日が休日の、所謂ニートだ。

「ちょうど良かった！」

「荷物は持たないよ」

断った側からビニール袋を押し付けてくる。

「良かったー。今日、とつても安かったから買い過ぎちゃったんだ」
「僕の知ってる限りじゃ、この店は常に百円だけだ」

聞こえない振りして雨宮はリュックの脇から鍵を探す。駐車を発見れば彼女の愛車がこちらを睨む。どうもあの切れ長のライトが好きになれず、真っ黒なボディーは雨宮に向いてるとは思えない。

証拠にドライバーは未だ鍵を探し、掴んでは取り出すのはレシートや菓子のみばかり。僕は呆れ、雨宮の細い腕を見守った。すると視線に気付いて、赤い舌が出される。

「ごめん、ごめん。ちょっと待ってて！ 乗ってくでしょ？」
「早くしてよ、暑い」

不機嫌な応えに、やっとリュックはコンクリートへ置かれた。紐を解き、大きく口を開ける。最初からそうすれば早いのに、言い掛け止めたのは、覗いた中身があまりにも酷いから。少なくとも僕の恋人は生理用ナプキンは見せないようポーチへしまっ。淡い色したワンピースを直視出来なくなった。

「あつた、あつた！」

暫くし、無邪気な声上がる。

「んじゃ、車持ってくるから、ここに居て」

すぐさま駆けていく雨宮。残されたリュックは開いた口が塞がらない。僕はいい加減見慣れてしまったが、あのキーケースを買いだ男はどうなのだろう。とりあえずリュックの口を蝶々結びしてやった。新しい彼との関係を荷物から察するのはフェアじゃない。

雨宮はだらしのない美少女。こんな風にいつも無防備で、少し壊れている。けれど最近こっも感じるんだ。結局の所、雨宮みたい女を男は求めてしまっ。この先も雨宮は男にだけは困る事など無いと思う。茹だる暑さで視界は歪むのに、不思議と雨宮の隣は鮮明に描けた。

雨宮のマンションに向かう途中、携帯電話が震える。僕の物だ。雨宮は一瞬だけ視線を寄越し、成美さんの名前を吐き捨てた。雨宮は男にされてるように僕の携帯電話をチェックしているらしい。

ボタンを押すと賑やかな雰囲気漏れてくる。

「あ、もしもし？」

「はい」

「今、大丈夫？」

「はい、休憩中ですか？」

「うん、今からお昼を買いに行くの」

車内の時計は三時を過ぎて、いつもならもう少し早い時間に休憩を取っているのに。また後輩のフォローとやらでもしたのだろうか。

と、サイドミラーへ前髪をいじる姿が映り込む。僕は昔から面倒くさがる時、前髪を触ってしまう。癖を発見した雨宮が声を殺して笑っている。

「今夜、会えないかな？」

「……本当に来てくれるんですか？ この間もそう言って来て来れなかったから。観たがってたDVD返しちゃいましたよ」

「うん、ごめんね」

成美さんは声を落とす。けれどトーンを低くした位じゃ優越感は隠せない。僕は知っている、成美さんは僕を傷つけて楽しむんだ。

待ち合わせの時間を確認しないまま通話は終わって、暗くなるデイ

スプレーに前髪を乱した僕が居る。

「大変ね」

感情を込められない雨宮。

「別に」

信号で待たされる雨宮は僕の前髪を整える。雨宮の指先は冷くて心地良い。流れて目を閉じると音が聞こえた。

当たり前の事だけど、今日も雨宮の心臓は動いている。

恋愛の先にあるのは何なのか。僕は出来るだけその事を考える。今も部屋には上がらず、ドアの前で煙草をくわえ考えていた。成美さんが約束を守った場合を考え、雨宮とのセックスは避けたい所。出来るだけスマートな言い訳を探す側から、大きな物音は立てられ続ける。なんでこんなにも部屋が汚いのか、雨宮は嘆く。

ちなみに僕が知る限り、部屋が片付いていた試しは無い。いつもこうして待たされては、その間に恋愛の先を思い浮かべるんだ。

「お待たせ」

後頭部を預けるドアが開く。わざと勢い良く開ける事でバランス

を崩し、それを理由に抱きついてきた。

「今日はしない」

「いや、ただ一緒に居たいだけ」

「嘘付き」

「嘘じゃない」

とは言え、雨宮の嘘は幼くて騙されてやってもいい気がする。むしろ、そんな嘘しか雨宮は付かない。寝室へ連れ込まれる手前、キッチン冷蔵庫が唸った。

相変わらず一人暮らしにしては大きな冷蔵庫。中身はキャベツと調味料くらいで、後は凍らせた物達。雨宮はやたら冷凍庫に放る癖がある。

今回は何を凍らせたのか、妙に気になってノブへ手を伸ばす。と、たちまち足下へ中身が落ちてきた。

「……サイダー？」

床をずしりと響かせたのは凍ったペットボトル。ペットボトルは膨張し、商品ラベルが破れそうになっている。雨宮も僕もサイダーを拾うでもなく、暫く見下ろした。

「ごんなの凍らせてどうするの？」

「あのさ、そんな事しか言えない訳？」

「だって他に質問なんて無い」

髪を耳に掛ける雨宮。柔らかく痛んだ毛先は纏まらず、はらはら頬を滑ってしまふ。そして埃のつもった床を眺め、鼻息で飛ばすことを思いつく。ああ、僕らはこんな時に思い知る。悲しい位に退屈だつて。

世の中には働かずとも生きて行ける、与えなくとも与えられる僕等がひっそり存在する。

このご時世、誰かの寵愛のみで生きられる、そんな都合の良い話など無いって疑われるだろう。人としての在り方を問われるのかも知れない。

だから僕に言えるのは、僕は成美さんに生かされている。誰しもが憧れる満ちた幸福に似た、不幸じゃない空間で息をしているんだ。それだけだ。

雨宮が無言でサイダーを押し戻す。

「でも君くらい。なんで凍らせるのかって聞くの」

「理由はあるの？」

首を振る雨宮。

「なら、見つかるといいね」

「は？」

「理由、凍らせる理由」

僕は笑ったのか、雨宮が表情を弛ませる。けれど相変わらず視線は迷子のままで、僕を越えた先、キングサイズのベッドを意識していた。

実はサイダーを拾った際、雨宮の足首が赤く腫れていたのに僕は気付いている。

雨宮は何回かに一回、まるで選ばなきゃいけないように暴力をふるう男を恋人として迎える。雨宮はボロボロになるのが好きなんだ。殴られ、なじられ、可哀想になった後、うんと優しい男が寄ってくるのを知っているから。

そんな雨宮もすっかり気を削がれたらしい。リビングに方向転換し、ニュースを流し始める。キッチンからだソファアに座る後頭部しか確認出来ないが、伝えられる世界の不幸にリズムを取っている。

僕は隣へ行こうと冷蔵庫から水道水を取り出す。サイダーの入っていた容器は、洗われないまま水道水を流し込まれたに違いない。この間はコーラの味がしたし、その前はオレンジジュースの色が残っていた。

それにしてもい部屋が汚い。リビングは最も酷く、テーブルの上には食い散らかした弁当やら化粧品が散乱している。

遮光カーテンなどうつすら黄ばみ、遮らないでいいものまでシャットアウトした。挙げ句、絨毯には摘める程の毛玉があちこちに発生し、僕は膝を抱えソファアへ座る。

「部屋の状況が心の状態を表すって、聞いた事ない？」

口を尖らせ、ペットボトルへ吸い付く雨宮。ちゅばちゅば、音をさせる。続けて「うーん」などと唸り、2LDKを見回した。

「もしそうなら、あたしもまんざら空っぽって訳じゃないのね」

ちゅば、入り口に舌を差し込む。先を細くし、嫌らしく左右に動かす。僕はこの予想しなかった返答に今度こそ笑顔を浮かべ、雨宮も笑った。

雨宮のマンションを出た直後、成美さんから呼び出しがあった。駅まで傘を持って来て欲しいと頼まれたが、どう見ても雨は降っていない。陽も落ち、日焼けの心配も無さそうだ。

雨傘を持って余している僕を見たい。つまり、そうう事だ。多分、成美さんは約束から数本遅れた電車ですって来る。混んでもない改札口をゆっくり降りて、僕を探す振りをする。とっくに認識している僕を、だ。

三本目をくわえ、星空を仰ぐ。星座は知らないが、星を観るのは嫌いじゃない。

滲む月へ煙を吹きかけ、唾を吐く。成美さんと会うのは緊張する。こういった関係は初めてじゃないし、飽きられない自信もあるのに。

ただ何と言うか。成美さんは完璧な不完全で、一度崩れたなら跡形も無くなってしまう。脆さを剥き出しにする女性。だから怖い、怖いけど知りたい。

成美さんの全てを知ってしまったのが、恋愛の先にあたるとしたらどうしようか。怖い、怖い。でも知りたいのが僕。だから暇があれば想像したがる。

行き交う人々はたまに僕の雨傘に視線を落とし、それぞれへ向かっていく。時間帯からサラリーマンやOLが多く、みんな疲れた顔を張り付けていた。

その自分ばかり疲れたって顔にはうんざりする。僕だって一ヶ月だけだがサラリーマンをした事があるんだ。まあ、満員電車や理不尽な上下関係に嫌気が差したという以前の問題で、朝出社したら会社が倒産していたのだけけれど。

今ならあの時の自分を笑い話に出来ても、当時はかなりのショックを受けた。

雨宮は僕がセックスのし過ぎて淡泊になったと言いが、二十歳の僕は童貞で、倒産の張り紙を踏みしめたその足でソープに駆け込んだんだ。

爪先で煙草を潰す。コンバースのハイカットはもう四代目になるか。煙草の銘柄は頻繁に変えてもスニーカーは違う。薄汚れたベンチへ丁度いい具合に汚した靴で乗り上げる。こんな風に膝を抱えて座るのは雨宮の所為。身体を小さく折り畳む体育座りは鼓動を感じられ、ほら、どくん、どくん、どくん。

個人的にはリストカットより、体育座りの方がよっぽど生きてい

ると思える。結局、痛いのが嫌いだ。優しくされたいし、優しくしたい。優しくするのは気持ちいい、優しくされるのは心地いい。

なら何故、成美さんは僕を傷つけたがるのか。切れ長な瞳で穏やかに見下すのか。

僕は成美さんが好き。それは家賃も食事も成美さんが居なければまならないし、依存、寄生と呼ばれて構わない。

ふいに視線を感じ、見れば成美さんがこちらへ近付いてくる。僕はすぐさま立ち上がり手を上げた。どうせ見えない振りをされるのだから、ゆるく振っておこう。予定通り、一回は僕を通り過ぎ、それから業とらしく気付く。

「お待たせ、帰り際に後輩から相談されちゃって。ごめんね、かなり待ったよね？」

僕の胸の前で手を合わし、薬指をきらきらさせた。

「うん、待った。来てくれないかと思っちゃった」

「そんな！ 約束をすっぽかしたりなんてしないよ！」

悪びれない仕草がほんのり期待に染まる。そんな顔をされたらキスをしたい、抱き締めたい。けれどその前に伝えなきゃいけない事がある。

「成美さんって、酷い人だなあ」

前髪を掻きつつ、困った風に呟いた。すると成美さんから抱き付き、その華奢な腕で僕の心の何処かを軋ませた。

もう最近じゃ痛まないけれど、成美さんにつられて僕も歪むのだ。いつもキレイに染められる旋毛へ溜息を吹きかける。

「くすぐつたいよ」

身を擦る成美さん。ピアスを撫で、項にも触れる。柔らかい、成美さんは張りの無い柔らかさ。

「どうしたの？」

「甘えたくなつて」

「なんだか珍しい」

珍しいも何も久しぶりに会えたんだ。成美さんの香りを目一杯吸って気持ちを耳へ吹き込んだ。成美さんは言葉を理解するなり財布を取り出す。決してスマートといえない手付きでジーンズに忍ばせて、金を貰った事がますます成美さんを強く求めさせる。

「成美さん、大好きです」

「ここに嘘などない。」

食って寝て食う。このトライアングルは崩してはならない。僕は成美さんを送った後、すぐさま買い出しに出掛けた。

どうも金を得ないと腹が空かない。働かざるもの食うべからずという父の教えが染み着いているなら気が滅入る。俯いた所で、床に映り込む僕は父親にそっくりだった。

父は未だ調理師として働いているのだろうか。高校を卒業して以来、実家と連絡を取っていない。いや、正確に言えば取れなかった。電話を取り次いで貰えない程、僕は継母に嫌われていたのだ。

こうして離れ、改めて考えてみれば、母は自分に似てしまった娘の手前、僕に辛くあたったのかもしれないと思えもする。

料理の盛り付けをあんなにも拘る父の再婚相手が、頬をニキビの痕で抉らす女性と知った際、僕は少なからず父に裏切られたと感じたはずだ。だって父はきれいなものが好きじゃなきゃいけない。

そして母はそんな僕を見逃さなかった。後から繕うとしたって受け入れては貰えず、結局何にするキレイなものは跡形も残らないんだ。で、逆のものはずっと残る。底の方でこどんでしまう。

ドリンクコーナーの前でサイダーが目につく。手に取ると雨宮の顔が浮かび、底には成美さんが見えた。キレイはものは跡形も無くなるといえど、成美さんは壊したら跡形がなくなるタイプ。そこに存在していたか分からなくなる人。じゃあ雨宮はというと、彼女

の容姿を整っていると感じないなら凶形認識に問題がある。雨宮は女性としての形は完璧に近い。いつかアイドルになれると進言したが、雨宮は決まって抑揚の無い声で返す。わたし働きたくないの、って。

結局、カゴの中に入れたのはサイダーが二本とインスタントラーメンだけ。支払いの際、鍵に付けたマスコットを紛失しているのに気付く。名前は忘れたが、深夜に放送されているアニメのキャラクターで、狼が椅子に座っているものだ。男を狼に喩える辺り、成美さんから昭和を嗅いでしまう。ちなみに僕にとってはナフタリンが昭和の臭い。

父方の祖母は押入れに大量のナフタリンを置いており、特別な日に食べるという菓子にまで臭いが移っていた。

両親が離婚し暫く、祖父母に預けられる事が多かった為、子供ながらあの菓子を喜んだ振りして食べたものだ。地味で無駄に甘いだけならまだしも、鼻を刺す臭い。トイレに行っては吐き捨て、唾を拭いながら父を恨んだ。

記憶にあるのは汚い映像ばかり。やはりキレイなもの残らない。僕にだって楽しい事はあったらうに、いざ思い出そうとしても薄いモヤがかかっている。

モヤに爪を立て引き裂いてもいいけれど、そうまでして取り戻さなきゃ生きられない現状じゃない。昔の良かった事に縋るのは嫌だ。たぶん、これが僕にとっての最後のプライドだ。

狼を失った旨をさっそく成美さんへ報告する。明日、もう今日になるか。早くから会議があると言っていたから寝ているかもしれない。成美さんは部屋のドアしか教えてくれない為、ベッドで寝ているのか布団かは知らない。そこへ横たえる身体の深くも知らない。

雨宮は僕らの関係を不潔と言う。僕だって求めるのが礼儀と思いつい、何度かは誘った。けれどその度、成美さんは自分達の間に行うは要らないと力説するのだ。

僕はいつも誰かの愛人をやってきたけれど、セックスは好きな方じゃない。特にあの濡れた音が。肌と肌が密着し、見えない糸と見える糸が絡まっては切れていく。女性が快感を求めようとあんぐり開けた口を、動物的に腰を振りながら見下ろす時、僕はどうしようもない気持ちになる。もし、この居心地の悪さを人が気持ち良いと呼ぶものなら、僕には自慰が向いている。

成美さんがセックスをしたがらないなら、それはそれでいい。むしろ有り難かった。

サドルに跨って返信を待つが、受信ランプは付きそうない。代わりとばかりに雨宮から電話が掛かってくる。

「もしもし？」

「雨宮ですけど」

「見れば分かる」

「番号登録してくれたんだ？」

雨宮の背後は賑やかだ。

「何処にいる？」

「迎えに来てくれるの？」

「車は？」

「お酒飲んじやったから」

「ねえ、何で成美さんと会う日に電話してくるの？」

質問の瞬間、辺りは静まる。少しすると通話が途絶えた音しか聞こえなくなった。溜息をつく間なく、雨宮から非難のメールが続々届けられる。

雨宮は既に食って寝て食うのライフスタイルに組み込まれているから、関係を断つ気はない。成美さんには気取られないようにする。三角形の均衡を守る為だ。だから再び携帯電話が震えても、気付かない振りをする。

どうか始まりも終わりもありませんように。思い切りペダルを踏み、立ち漕ぎに切り替え、星空を見上げた。星は遠い。遠すぎる。これを手に入れようなんて望まない。無茶もしないから、僕からこれ以上取り上げないで。

けれどそんな祈りを捧げた夜は僕を裏切った。

僕の名を呼ぶ人が久しぶりに居た。大きなボストンバッグを抱いた垢抜けない表情が、僕をたちまち苛立たせる。戸籍という括りが僕とマキをより隔てている。促された椅子へ崩れ込み、唇をぎりぎり噛んだ。

そう言えば、マキが僕を追って家を出たと母に責められた。あの時は、どうせ窮屈から飛び出す口実にされたのだと気にしなかった。と言うよりマキの存在自体に興味が無かった。

血が半分は繋がっていると言われてもそれは目に見えるものじゃなく、そもそも血は量じゃない。母の言動に腹を立てるのに疲れ、全く似つかない妹は地味で頭が悪い。きれいなもの好きな父似の僕は到底受け入れられない。

それがどうしこんな場所へ呼びつけられなきゃいけない。菓子折りを持って行った以来、管理人の私室など用は無かったはずだ。

アパートは成美さんの前の前の女性が借りたもので、今時甲斐甲斐しく入居者の面倒をやく管理人がいる、確か名前は南野。北部屋に住む管理人の南野です、なんて自己紹介が強烈で忘れさせてくれない

いつもは何時に帰ろうが構わないこの管理人が、今夜に限っては表をうるうるし、坂道を上る自転車を見つけるなり駆け寄ってきたのだ。

形だけの兄妹は向き合い、沈黙は続く。僕への来訪者は南野にはめでたいらしく、テーブルにはコンビニの赤飯が置いてあった。それにしても南野の部屋は生活感に満ちみちている。壁に無料配布されたカレンダーがいくつも張っており、ゴミの日や会合などの予定がみつちり書き込まれていた。側には水性マジックが蓋を開けたまま転がり、ペン先から想像上のシンナーが臭う。

はつきりいつて物があり過ぎなんだ。収納用のカゴも無意味、質量に耐えられずプラスチックが歪んでしまう。

「とにかく、お部屋でゆっくりしておいで」

マキをすつかり気に入った様子の南野。年寄りがぽつちやり体型を好むのは本当らしい。ぱんぱんに張った頬を褒めちぎり、マキもまんざらじゃないから絶句してしまう。言われなくとも、こんな場所にはいつまでも居られず、仕方なくマキを連れて席を立つ。

「どうもすいませんでした」

「怒らないであげてよ？ マキちゃんはあなたが心配だったただけなんだからね」

「わかってます」

流石の南野も僕らの空気を察する。今日は時間も時間で、南野の手前泊まらせるが、明日一番に追い出す。マキは黙って後ろへ続き、足音をさせた。

「やめてくれない？」

階段に差し掛かり振り返る。一步を踏みだそうとしていたマキは

不機嫌な僕を見上げ、かくかく首を傾げた。

「にいに、何怒ってるの？」

「その呼び方もやめろ」

「だってお兄ちゃんじゃん」

数年振りのマキはやはりマキで、それ以上でも以下でもなかった。あんまりにも変わらない鈍さは呪いだ。

痩せて自分を良く見せようとか、学んで賢さを得ようなど、これっぽっちもしないマキ。生まれた時から僕が兄で当然の、優しくされるのをひたすら待っている。

奥歯を噛んでいるとマキが笑う。

「にいに、格好良くなったね。彼女いるんでしょ？ 雨宮さんって人」

隣へ並ばれる。錆びた階段は様々な感情で軋み、もう少し高さがあれば突き落としてやりたかった。これも色んな意味で。幸い、僕とマキの間にはポストンバッグが挟まれ、少しは吸収される。

「すごい美少女みたいだね？ 管理人さんがアイドルみたいって言うってた」

「お前とは違うんだよ」

語尾に「ブス」と付け加えようとした時、僕は久しぶりにこの単語を口にするのに、はっとする。

これは実家を離れて以来、マキほどのブスに出会っていない証拠

なんだろう。

「ねえ、にいに」

僕は応えず部屋に向かう。

「あたしはさ、にいにを裏切ったりしないよ」

鍵を回す。最低限の開け閉めをしたが、マキのスニーカー、コンバースのハイカットが押し込まれる。

「美人は裏切るよ」

「何を根拠に？」

「にいにのお母さん。それにあたしのお母さん」

僕が吹き出すより先、マキが笑う。

「母さん、浮気されてもされても離婚しないんだ」

「で、家を出た訳？」

スニーカーに続き、パーカーまで押し込まれるが、フードがドアチェーンに引っ張られ顔が歪む。肉を削いだ素顔は母にそっくり、思わず退く。マキはそんな怯えを潜った。

「違う、にいにを助けにきたんだよ」

脱ぎ捨てるスニーカーは曇りを示す。昔、僕らは靴を放り投げたは天気を占った。靴が表なら晴れ、裏だと雨。横へ倒れると曇り。

マキは覚えているだろうか。ピアノ教室への送り迎えを強要された僕は、天気を占うと言ってスニーカーを背中にぶつけていたのを。マキは痛い痛って繰り返し、やっと僕の前を歩かなくなったんだ。僕はあの日の事を、たぶん今日みたいな日を消せない記憶で持っている。

僕はドアを滑り、膝を抱えた。

「いに、帰ろうよ。あたしが一緒に帰ってあげるからさ」

「うるさい。帰るなら一人で帰れよ！」

「そんなの出来ないって、いにが一番知ってるじゃん」

リビングへのドアを開けて、こちらに戻ってくる。靴下だけになっても足音は粘着く。

「大丈夫、ブスは三日で馴れるって言うじゃん」

言いながら僕を引き上げた。

強く、強く握られる感覚こそ、あの日の続きみたいだ。

「吐き気がする、触るな！」

「ねえ、いにを愛してるって事が、そんなに気持ち悪い？」

「ああ、気持ち悪い！」

何もかも振り払い、水道に向かう。蛇口を思い切り捻ったら、溢れるコップを睨む。

「お前、どうしてここが分かった？」

「ずっと探してた」

「だから、そういうのが気持ち悪いんだって！」

怒鳴りながら振り返ると、距離を異常に詰めたマキが居た。反射的に仰け反った為、姿勢を崩し、シンクで頭を打つ。

気付けばマキが僕を見下ろしていた。

翌朝、追い出される前に朝食を差し出される。僕はもちろん食う気や、会話するつもりも無い。裸足でベランダへ出て、起こってしまった最悪を嘆く。

庭先を掃く南野が居た。僕に気付くと額に手をやり、眩しそうに見上げる。

「おはようございます！ 今日観光？」

「いえ、何処にも行きませんよ」

マキへ聞こえるように続ける。

「今から約束があるんです」

南野の背後を指さす。雨宮は絶妙なタイミングで坂道から登場し、僕らへ合図を送る。スマートとはこういう事。

「ああ、こんにちは雨宮さん」

無駄に大きな南野の声がキッチンに居るマキを刺激する。僕はすかさずマキに言った。

「雨宮が来るんだ、出てってくれない？」

トーストを一口しただけで、マキはテレビを観ている。後ろ姿でさえ美しくない。僕はマキを出来るだけ傷つけてやりたくなった。言葉より確かな現実で、マキは傷つくべきだと思う。

殺気を帯びた視線にやっと振り向くマキ。一瞬笑おうとし、やめた。

「出てかないなら、雨宮を紹介してやるよ」

ぴんぽん、やっぱり良い間でインターホンを鳴らしてくれる。マキは慌ててフォークを握り日常を演出するが、緊張を隠し切れな

い。
僕はわざとそんな正面を横切ってやった。マグカップの中を激しく波立てたくて。

それから雨宮と僕とマキはテーブルを三角形で囲む事となった。予想通り、雨宮は妹を紹介しても驚かず、マキは雨宮を見るなり俯く。今日の雨宮は化粧をしっかりと施し、服装も大胆。圧倒的に美少女だ。

「これから会つの？」

僕は遠慮なく雨宮を爪先から眺める。

「にいに！」

雨宮を直視出来ず、僕の顔色ばかり伺っていたマキが咎めた。が、それはすぐ雨宮に一蹴される。

「いいよ、別に減るもんじゃないから……えっと」
「マキ、です」

長い足を窮屈に組み替え、マキの旋毛を見る雨宮。ぱっちり見開かれた二重はマキをどう映しているのだろうか。

「何？」

雨宮には僕が欲情などしていないのは伝わっている。

「別に。似てないだろ？」

「まあ、ね」

ふ、と息を抜いて続ける。

「マキちゃんって前髪、天パ？」

「え？」

「ほら、内側がくるくるしてるじゃん」

顔を上げたマキに雨宮は笑顔を向けた。雨宮の笑顔に暖かさや優しさなど無い。ただ顔のパーツそれぞれが、きちんと役割を果たしているだけ。だから妙な凄みがあり、マキが息を飲む音が聞こえた。

「どうしたの？」

肘をつき雨宮はマキを覗き込む。僕の位置からマキがどんな反応をしたか分からないが、美しい雨宮の後頭部に遮られるのなら悪くない。

「いえ、なんでも」

消え入りそうな声で。いっそ、このまま消えてしまえばいい。

「な？ マキ。雨宮とお前は違うんだ」

「ち、違わないよ！ あたしもいにが好きだもん！」

マキの叫びは跳ね、雨宮を飛び越えた。すると雨宮はマキの発言がより通るように伏せる。

「なんだ、なんだ。兄妹のいけない関係？」

頬を片方だけ膨らめて茶化する。今にも吹き出しそうな呼吸がテー

ブルの表面を白く曇らせる。

「バカ言うな！ 冗談でも気持ち悪い」

言つて、雨宮の頬へ触れた。柔らかい。本来、この指に吸い付く白い肌は化粧など必要ない。けれど今の男が望むのだろう。雨宮の舌が僕の指を頬の下からなぞる。

「羨ましいなー、わたしには妹しか居ないから」

何気なくこぼした言葉が響く。雨宮は自分の事をあまり話さないし、僕もあえて聞かなかつた。雨宮の妹なら同じように美少女なのだろう。

「うん、ご想像通りの街で有名な美少女だった。わたしの妹」

だった、過去形を強調してくる。これも珍しい仕草。雨宮は何か訊ねても、結局答えは要らない。僕はそんな所が嫌いじゃなかつた。

「だったって」

このまま流していける話をマキが止める。ああ、マキや母はいつもそう。雨宮と違い、マキ達は女の端をぎりぎりで生きているので余白が無いんだ。余白が無いって事は常に爪を立てなきゃいけないの意味する。

「だったって？ どういう事ですか？」

「うん、悪い男に騙されて死んじゃつたの」

ゆっくり体を起こす雨宮。

「マキちゃん、だっけ？ ごめんね、わたしすぐ忘れちゃうの」

マキの言葉を拾う為、髪を耳にかける。その形のよい耳に吸い込まれない為、僕の口は自然と結ばれる。

「はいマキです」

「うん、覚えた。マキちゃんね」

雨宮とマキは同世代だが、向き合つとマキの方が断然幼い。容姿だけでなく纏っている雰囲気からして。

こんな田舎者を妹と紹介出来るのは雨宮くらい。成美さんには出来ない。

「マキちゃんはいにと何するの？」

「え？」

「好きなんでしょ？ セックスしちゃうの？」

突然、浮ついた視線を切り替え、尖った目をする雨宮。

「な、なに言ってるんですか？」

「嫌なの。マキちゃんに触れた手でわたしに触られたりするの」

こちらを見る雨宮。

「は？ そんな事、ある訳ないじゃん。妹だし……それに」

このタイミングで容姿を辱めれば、マキは窓から飛び降りてくれるだろうか。三階から落ちた位じゃ死にはしないが、悪趣味なベージュのブラウスくらい鮮やかに染め直せるだろう。

「マキちゃん、言っておくけど、わたしはにいが好きじゃないんだよ」

マキは混乱し、椅子を蹴って立ち上がる。その位置からみる雨宮はより美しいのに。自分の発言が理解されないのを諦める雨宮は傍げで、芸術めいている。

「でしょ？ にいに」

「その呼び方はやめろ」

「だって、にいがわたしを好きなんだもん」

マキに呼ばれるのとは違った寒さを覚え、視線を外す。が、雨宮がこちらを見ている気配を強く感じる。

「にいに裏切られたら、わたしも死んじゃおうかなー」

テーブルに映り込む髪をいじる姿。柔らかく痛んだ毛先はやつぱり指先をすり抜けてしまう。

「し、死ぬなんて！ 軽はずみな……」

「マキちゃんには分かんないよ。だって幸せじゃん」

「幸せって」

「バカみたいに幸せ、じゃん」

マキには想像がつかないのだろう。こんなにも美しく生まれた雨宮の不満など、分かりたくもないはずだ。

けれど雨宮にすれば、そんなマキの鈍感さが勘に触るに違いない。

僕の知る限り、女性はいつも誰かに嫉妬しながら生きている。嫉妬する自分を認められず、嘘をつく。決して美しいとは言えない感情に化粧をし、オシヤレをさせて紛らわすものの、時折、嫉妬の尾を出してしまうんだ。

嫉妬の尾は導火線。ちよつとした摩擦で燃え上がる。

マキは深呼吸を繰り返し、それから雨宮の手を取った。

「もっと自分を大切にして下さい」

「え？」

「そんなに可愛いんですから、何だって手に入りますよ？ にいに以外なら」

雨宮を釣り上げる力は強引だった。雨宮はすぐさま抵抗し、距離を置く。何か発しようとしたが飲み込み、代わりにバッグを掴んでドアへ向かう。

僕は声を掛けなかった。

ドアが閉まり、階段が鳴るとマキの力が抜け、乾いた笑いが室内をより乾燥させた。もはや背もたれに触れただけでも、発火しそうな雰囲気、僕は心の中の煙草を吸う。

マキは僕を好きだと言う以外、これといった主張をしなかったから、学校や社会生活においてもそうだと思っていた。僕の放つ嫌みを受け止めるよう、他の誰にも逆らわず生きている。そうしなきゃ生きられないって疑いもなかった。

それが今、あの雨宮に敵意を剥き出しにしたのだ。僕はトーストを押し込むマキを眺め、高鳴りを隠せない。雨宮の容姿はマキに止めを刺せると考えたが、現実は違う。マキは雨宮と競る事を選んだのだ。万が一、マキが雨宮に勝っているものがあるとすれば、それは僕の知らないもので、知らないなら知りたい。

「いに、雨宮さんは可愛いだけだよ」

「でも可愛くないよりはいい」

喉を鳴らし、色々飲み込むマキ。

「別に顔さえ良ければいい訳じゃない。雨宮と僕は似てる」

何処がと言われる前にマグカップを置いた。

「例えば、こんな苦い紅茶は飲めない所とか。そういうの」

マキは黙る。暫くそうして、わかんないよって吐き出した。マキは泣いているようで、泣いていないのかもしれない。困らされてる顔しか印象になく、まあ、どうでもいいか、いいんだけれど部屋にもう少し置いてみよう。

「仕事見つける」

僕は言う。

「見つけたら、ここに居てもいいの？」

「家賃と生活費くらい出せ」

途端、マキの食が進んだ。サラダをかき込み、トマトを潰す。そのトマト、ゴーヤは成美さんが持ち込んだもの。

成美さんは僕が意識しないと思っっているが、食材は肌に良いものばかりと雨宮はすぐ見抜く。雨宮と二人で、染みやソバカスが宝の地図になればいいのに、なんて昭和臭い事を言う成美さんを想像した。

ところでマキが成美さんを見たらどう思っのだろう。金銭援助をしてくれるのならマキは成美さんの代わりになるんだろうか。ふとそんな事が過ぎり、すぐ消える。

残念な事に僕はマキに借金までさせて貢がせるのは嫌だ。借金が血液を巡ってくるのを知っている。意思はどうあれ、マキは妹。妹は他の女とは違う。

マキは兄妹の関係を守りたいだけ。僕への好意もここからくるもので、雨宮の想像した類じゃない。僕だけじゃないはずだ。妹を持つ男なら分かる。妹は男でも女でもない存在だ。

片手に携帯を持ち、マキは熱心に求人情報を見ている。今日までマキを意識してこなかったが、認識してみると妹も三角形に取り込める気もしてきた。

これまで自分も三角の一部だが、雨宮、成美さん、そしてマキが結ぶ図形の内側に収まるのもいいかもしれない。

数時間後、さっそくマキは科学館でのバイトが内定した。プラネタリウムの案内係らしい。

「星座は詳しくないけど、星を見るのは嫌いじゃないんだ」

マキは何処かで聞いた事を言っていた。

僕が初めて抱いた女は星菜と名乗った。源氏名だ。

朝、入社したら会社が倒産しており、気付くとソープへ逃げ込んでいた。こんな時は女に優しくされればいい、本能が導くまま星菜を指名する。遡る事、三年前。二十歳の頃だった。

パンフレットの女達はみんな同じ顔で見分けがつかなかったものの、実際に会うと個性をぶつけられた。星菜は写真で見る方が断然可愛く、きつと不慣れな僕は体よくあてがわれたのだ。けれど不思議と怒りは無く、逆にほっとしてしまう。

星菜はドアの前で立ったまま、そんな僕の反応を待っていた。

「ねえ、うちでいいの？」

聞くに耐えない、酷く掠れた声で訊ねられる。

「お兄さん、かつこいいし。他の子が入りたいって言ったよ」

「星菜さんは僕じゃ嫌？」

ベッドに腰掛けた僕を見下ろす位置にありながら、星菜は飛び降りそうな顔をした。

「もしかして、同業とか？」

「違うよ、今日から無職」

下着とスーツが微妙な距離で対峙する。先に笑ったのは星菜。修正を施さない笑顔は皺が幾つも入り、歯も黄ばんでいる。そこに焼け死んだ声加われば、僕の良心を簡単に殺してくれた。

星菜は隣に腰掛け、足をばたつかせた。軋むベッドが二人を乗せる船だとしたら、前に進めず、ゆっくり沈んでいくのだろう。

「リストラされたの？」

「まあ、そんなとこ」

「で、自棄になってこんな所に来ちゃったんだね」

灰皿を向けられた。

「吸えばいいのに」

ブランドロゴを大袈裟に主張するポーチから、セブンスターと百円ライターを取り出す。

「煙と一緒にヤな事も吐き出すの」

「僕とするのが嫌って意味？」

この質問に星菜は肩を竦め、痛んだ毛先を方々へ散らす。

「好きな仕事をやってる人は少ないでしょ？ それに鬱憤をぶつけられて感じる女も少ないよ」

星菜は胸だけがやたら大きく、他は血管が浮き出るくらい細い。煙を出し入れする度、あばらが見えた。そのうち僕の視線に気付き、目で訴えてくる。どちらでもいいから早くしろ、と。

漠然と初めては恋人とするものだと思ってきた。煙草の味がするキスや業とらしい喘ぎもAVでの世界。

あの時の僕は昔から知っていた風に腰を振るのが精一杯で、壊した上から塗り潰される世界など知らなかった。セックスをする為だけに逃れた一問が、世界の全てじゃないって信じていた。

結局、セックスしても星菜に愛情を抱けず、星菜が僕を好きになつたりもしなかった。

星菜を久しぶりに思い出した所為で、脳は未だぼんやりしている。記憶をこうして取り出し、たまには撫でてやるのもいい。押し込められた記憶は撫でられると眠くなる。仕事を失ってからいまいち熟睡出来ないのは、浅い眠りは目を開けても微睡みを残し、現実を夢じゃないかって期待してしまう為。こんな僕だって、人生をやり直せるならやり直したいんだ。

寝返りを打った所で成美さんからメールが届く。会議が長引き退屈しているらしい。すぐに当たり障りの無い返事をし、天井を仰ぐ。ニコチンが染み着いた空を蛍光灯が黄色く照らす。

再び携帯電話が震える。今夜が満月だと伝えられ、カーテンの間から探るが確認出来ない。月が浮かぶ方角には高層マンションがあつて、ベランダに出てみても洗濯物を干す女性しか見えない。

よく成美さんは洋服はデザインより生地、生地よりサイズだと口を酸っぱくして言う。サイズさえ間違わなければ様になるのは、なにもファッションだけじゃないのに。恋も仕事も身の丈にあったものを選ばなきゃいけないんだ。

ちなみにあの女性の場合、ミニスカートは止した方がいい。ふくろはぎの筋肉が逞しすぎる。ちょうど心地よい風が吹き、色とりどりの洗濯物が揺れた。

成美さんはどんな気持ちで、この夜を眺めているのだろうか。未だに流れ星を探し、見付けられずに居たらどうしよう。

僕からは月も星も見えないとメールに乗せる。すると、すぐさま希望通りの返事をくれた。

明日、プラネタリウムに行きましょう。

週に二度も呼び出されるのは珍しい。早起した僕はマキを無視し洗濯機を回す。家事の中で洗濯だけは嫌いじゃない、マメにしていると思う。洗面台の収納には柔軟剤が何種類か常備しており、その日の気分で選んだりしている。

兩宮とドラッグストアに行った時、柔軟剤の香りを次々と嗅いでしまい気味悪がられた。

今日はおひさまの香りとやらに決め、背中で洗濯機の振動を感じる。

「今日は、早いんだ？」

開けたままにしたドアからマキが顔を出す。寝起きのマキはまず悲劇でサイダーの口を開けさせる。

「バイトは？」

「うん、午後から」

顔を洗おうとしないのは二度寝をする為だろう。きっとドアを閉めに来たんだ。

僕は業と足をドアへかけてやる。この部屋で熟睡はさせない。僕と同じような浅い眠りを繰り返したらいい。

「いに、足の爪切った方がいいよ」

流石のマキも不快を露わにする。自分の潰れた小指の爪は棚に上げ、こちらの足を見つめてた。

「帰りに爪切り買ってくるね。あと水も」

「水？」

「そんなにサイダーって美味しい？」

生え際を掻きつつ、その場へ座り込む。マキの前髪は雨宮が言った通り、癖が強い。それも内側だけで、こうして見下ろすとよく分かる。

「アパートの近くに安いスーパーがあったの」

「……買う金あるの？」

膝を抱えた姿勢で首を回す、不自然な角度で僕を伺う。

「もし万引きして捕まったら、いにが身請け人になるんだろうね」

喉に張り付いた笑い方をする。

「それって金を寄越せって言うてんの？」

「違っつて。想像して楽しんでるだけだから」

「夢みたいなら布団に行けよ」「ねえ、いに」

通り過ぎようとしたらシャツの裾を捕まれた。

「……………何？」
「兄と妹の関係って永遠なんだよ、やっぱり。それこそ覚めない夢
ってやつじゃん」

元より細い目をさらに細められ、爪先から寒気が駆け抜ける。まるで繋がっている分の血液だけ反応したような、ざらついた感覚。僕は勢いをつけてマキを振り払い、リビングに向かう。床へ敷かれたブランケットがマキの抜け殻みたいで蹴り上げた。ペットボトルをぎりぎり軋ませる姿を、死に損ないのセミが笑っている。

みーん、みーん、みーん。

僕の住む街は春になると桜が咲き、冬になれば水溜まりは凍る。そんな当たり前の街。この風景が好きかと訊ねられても嫌いではないだけで、明日引越す事になっても構わない。

成美さん曰く、そんな風に考えていても、結局は生まれ育った街へ帰りたくなるらしい。もしくは、帰れない街に似た雰囲気を選ぶんだと。

サイダーを買いにマキが言っていたスーパーへやって来た。僕が通っている店と違い、泥がついたままの野菜等に出迎えられ、自動ドアの先には品だしする店員の尻が並ぶ。昼時とあって総菜コーナー前には、親子連れや作業着姿の男達が集まっていた。

十分あれば周りきれしてしまう店内。サイダーはお茶などが品薄になっっている中、一本も欠ける事なく陳列されている。それでいて冷えていない。奥のものを取り出そうとすると、脇の鏡に人影が映った。それを何気なく見ていたら、サプリメントを物色していたその人もこちらへ気付く。

手元から箱が落ちる。

「あれ、成美さん？」

そのシルエットには見覚えがあった。いつもと雰囲気は違うものの、立ち方が成美さんだ。

僕はサイダーを二本から三本へ握り直し、改めて声を掛ける。

「こんな所で珍しいね？ 今日休みだっけ？」

カゴに入れてから顔を上げた。と、そこに成美さんの姿はなくなっていた。辺りを見回すが、今見た映像だけが不自然に切り取られたみたいだった。

床には新陳代謝を上げると謳われたダイエットサプリが落ち、棚に戻してやると同時に携帯が震えた。

「……もしもし、成美さん？ 今、何処？」

「え？ 何、いきなりどうしたの？」

棚に寄り掛かって、受話器に耳を押し当ててる。

「出先でね、成美さんに似た人を見たんだ。これって幻覚かな？」

「幻覚って、何？ そんなに私に会いたいの？」

「うん、きつとそう」

成美さんが優越感を得ているのを、いつもよりずっと近く感じられる。

「でも、今日は周りはずるさくないんだね？」

「え？ ああ、今は車内だから」

「こんな時間に連絡くれたから、今夜は会えないって言われると思った」

成美さんが息を飲む音が、いつもよりずっとクリアに聞こえる。

「ねえ、どうしたの？」

「待ってるから、成美さん。プラネタリウムで待ってるから、来てよね？」

「う、うん。行くから！ ね、そんなに悲しい声出さないで」

僕は声に出さず頷き、振動を伝えた棚から商品を落とす。中身を抜かれた商品達が僕を見上げています。

成美さんはメンズ向けのバッグを売っている、と聞かされている。お世辞にも華やかと言えないルックスでも、洋服のセンスや知識量がそれを補って僕らの関係を築いた。成美さんの言葉を昭和臭い、説教っぽく受け取る事も多いが、同時に懐かしくもあつて。思えば、出会ひもこのプラネタリウムだった。

アパートから二十分程歩いた、駅から遠くバスも停まらない場所に科学館はある。着飾らない建物は一見、工場みたいで、前の道を行き交うトラックが良く似合う。

僕が見つけた頃には壁は灰色だったけれど、たぶん最初はクリーム色のはず。敷地内の噴水がそれを教えてくれる。

節水を理由に七色に輝く噴水は週末しか流されない為、中央では乾いた水瓶を担いだ男は暇を持て余す。僕はそんな彼へ近付き、瓶を覗き込む。そう、ここだけは汚れずクリーム色をしているんだ。これを見つけたのが成美さん。

あの日、成美さんは偶然通り掛かった僕を科学館のスタッフと勘違いした。僕としては顔を瓶へ突っ込む女性など関わりたくなかったが、謝罪と言いつつ一方的に伝えられてしまう。で、聞いてみたら何の事はない失恋話。恋人と別れ、貰った指輪を捨てたいと言った。

当時から雨宮と関係を持っていた僕は、パンツを無様にロールアップした成美さんの愛人になるとは思いもしなかった。それに妙なロマンチストの相手も懲り懲りだ。

噴水のふちに座り、会話が一区切りするのを待っていると、成美さんはバッグからハンカチを取り出して足を拭き出す。指と指の間を丁寧に払い、手入れが行き届いた爪をきらきらさせる。それから僕越しの太陽を遠い目をして眺めた。

この時の成美さんは退屈な景色から抜け出した、抜群の存在感を放つ。

きつと恋に落ちる瞬間って、こんな感じ。ぞくぞくした。勢いと下心に任せ、僕は成美さんをプラネタリウムに誘ったんだ。

今日最後の上映時間が迫っている。成美さんから連絡は無い。仕事事が忙しいのか、気が変わってしまったのか。どちらにしろ僕から連絡しない。それは成美さんの悪女気取りの骨頂が約束をすっばかす事、忘れた振りする事にあるからだ。

それに雨宮の男選びじゃないが、優しくしたい相手に逃げられたなら、優しくしてくれる誰かがやってくる。

コンクリートをずる足音に振り返ったら、マキが居た。

「にいに？」

「……何？」

「や、あ、あのね、外で座り込んでる人が居るって」

「待ち合わせがあるんだ」

「雨宮さん？」

首を横にした途端、マキは回り込む。

「すっぱかされちゃったの？」

「まあね」

「じゃあ、一緒に帰る？ もう終わりだから」

「不審者の報告はしなくていいのか？」

「兄さんが迎えに来てくれたって言うもん！」

マキは科学館の入り口に向け、手を振る。見れば、いかにもマキを顎で使いそうな同僚達がこちらを伺っていた。マキの説明を受け、慌てて挨拶をしにきたが、頭から爪先まで好奇心を滑らされる。しかも、ある一人の顔には露骨な誘いが書かれ、出かけた拒絶を煙草で押し込んだ。

「ねえ、にいにを紹介してって言われちゃった」

「必要ない」

「だよな？ 雨宮さん位、可愛くなきゃ駄目なんだもん」

「別に可愛くなくてもいい」

同僚の前で浮かべていた笑顔を火と共に消す。

「え？ だって可愛くないより可愛い方がって」

「そうだな」

「なに、それ」

「マキには関係ない、さっさと行け」

二本目を取り出し、マキを覗む。

「いに、ここで待っていてくれるよね？ 一緒に帰ろう？」

僕は応えず、空を見上げた。

「なあ、まだプラネタリウムってまだ観られるか？」

「え、あ、うん。あと一回上映あるよ？ 観てく？」

その提案には素直に頷く。マキの声音がぱつと明るくなり、僕を招いた。こっち、こっちって優しい方角へ。三角形はたまに辺が伸ばされて二等辺になる。

今朝、何事も無かった風に成美さんからメールが届いたので、僕もプラネタリウムは妹と観た事を返しておいた。ほぼ貸し切りの最終上映をこっそり盗撮したところ、雨宮の言う通り、何も映っていない。そして、雨宮が今飲んでいるサイダーも真っ黒だ。

「なんだよ、イカスミサイダーって」

「彼のお土産」

「ふーん」

「あ、ヤキモチ？」

「まあね」

雨宮はセックスが終わるとすぐにシャワーを浴びるのに、その後は下着姿で過ごす。

「髪、拭けよ」

「えー、めんどくさい。拭いてよ」

水気を全く落としていない旋毛を押し付けられ、乱暴に拭ってやると、次なる面倒を持ち出してきた。

「トキちゃん、元気？」

「トキ？」

「うん、天然記念物な妹ちゃんだよ」
「生きてはいるよ」

ソファーへより沈み、僕の腰を足で挟んでくる。

「おい、髪拭けないじゃん」
「ねえ」

雨宮の肌の上だと黒い下着はシミのようだ。個人的には白を付けて貰いたいが、服装に関しての権限は恋人にある。これは思っても口にしないが、雨宮には着せかえ人形としての楽しみ方も存在する。

「ねえってば！」

起き上がり、首にも絡み付いてきた。

「雨宮、どうしたんだよ？」
「どうもしてない」
「サイダー、炭酸が抜けるぞ？」

テーブルへ手を伸ばそうとすると、雨宮は身を乗り出して噛み付いてきた。あうあう、声に出しながら甘噛みされ、僕はどう反応したらいいか、また正解は何なのか迷う。雨宮の事だから、どれも正解で不正解なんだけど。

ただひとつ言えるのは、欠けた八重歯だけは僕を本気で砕きたがっている。

三分経ってから雨宮を剥がすと、飢えた口にサイダーをしゃぶら

せた。雨宮は黙ってそれを飲み干し、ゲップと共に体を横たえる。頬に張り付く髪を払う指先が何かを握りたそうに丸みを帯び、僕はその穴へ手を突っ込んだ。

「ごめんね」

寢息に謝罪を紛れ込ませる、雨宮。僕は寝た振りが本当になるまで考え事をする。恋愛の先にあるもの、とか。

「にいに、何考えてるの？」

「寝たんじゃないのか？」

「うん、これ寝言。で、何考えてるの？」

穴に入れた指を締め付けてくる。

「この部屋の片付け方、とかかな」

「えー、本気？」

「てか、なんでリビングに靴を脱ぎ捨てるんだよ！」

しかも片方だけ、を。すると雨宮はうつすら目を開けた。

「あれ、もう片方、どうしたっけ」

「覚えてないのか？」

「わたし、そんなんばっかだ」

再び、全てを閉ざすよう目は瞑られる。もしここで僕が指を抜いたら、このトンネルは何処へ繋がり、誰に埋められるのだろう。

「雨宮、起きてたらセックスしよう」

僕から誘うのは珍しいのに、反応を示さない。肩を揺すってみても薄ら笑いを浮かべるだけ。

「なんか、にいに誘われながら眠っちゃうのもいい」

「おい、雨宮」

くるり、背中を向けて膝を抱く。歪みのない背骨を見せつけられた。

「雨宮、もしかして泣いてる？」

鼻を吸る音がした。

「知らなかったの？ わたしはずっと泣いてるんだから」

臍に顔をくつつける位、小さく小さく体を折り畳む。そのボストンバッグへ詰め込んでやれそうだ。

もし雨宮を積んで逃げ出すとしたら、何処に行こう。肉よりサイダーが好きで、野菜よりサイダーが好きな僕らはドリンクコーナーに住み着き、霜が降りて、そのうち凍る。

ねえ雨宮、問い掛けようとして止めた。既に眠気を無くした体は熱い、キスして甘い気泡を分け合う。

ねえ雨宮、社会に触れる部分が他よりずっと少ないはずなのに、誰より傷つけられたって思っちゃうんだ。そう感じなきゃ、生きられないから。

僕は空っぽの雨宮へ息を吹き込む。こっやって酸素を送り続けても、一方では空気が抜けていく。ひゅー、ひゅー、ひゅー。

その日は彼女達に関わりたくなかったのに、自転車に跨るとマキが後ろへ飛び乗った。

早朝は雲一つない青さ。腰を上げ近付いたら、良い香りがする。誰かの朝食だろうか。

実家暮らしの時は毎朝食べさせられた。父が揃って食事すれば二度目の離婚は無いと言い、みんなで従ったんだ。特に僕は実母がそうさせたと知り、文句を言わなかった。母は父の手料理を食べられなくなった辺りから、父を生理的に受け付けなかったのだと思う。幼いながらも僕は、生理的な嫌悪はどうしようもないと知っていた気がする。これは許すとか認めるとかの次元じゃなく、もっと単純で残酷なものだから。母は今でもきつと後悔だけはしてないだろう。僕を引き取らなかつた事も。

と言つて、現状を母の所為にしたりしない。全ては僕が選んできた結果だ。

河原に沿って建てられる工場達は煙を吐き出す。知らない間に雨が降ったらしく、ぬかるみがスニーカーを汚した。地面に座るのを諦め、姿勢をハンドルに預ける。と、肘がベルをこつく。ちりーん、錆び付いた音がする。

それにしてもいい天気。流れる煙を追う。踏ん張って上半身を反

らしたら、口の中がサイダーの名残で甘くなった。それを唾と一緒に吐き出そうとした時、マキがやっと居心地の悪さを言葉にした。

「にいに？」

呼び掛けは何度か続くが、無視した。するとマキは丈のある草を掻き分け、堤防を降りて行った。その足取りは乱暴だ。

「おい、何をやる気だ？」

仕方なく高い位置から訊ねる。声が届かない距離とは思えないので、今度は僕が無視されたんだろう。河原に着いたマキは屈んでは石をひっくり返し、少ししてから立ち上がって水面を覗む。

僕も続き、膝まで茂る草を駆け下りた。

「何してるんだ？」

質問にマキは視線を対岸へ外し、僕も釣られてなぞる。向こうには畑が広がっていた。

「にいに、サワガニ探そうよ」

「は？」

「サワガニだよ、サワガニ」

急に楽し気な声へ切り替え、僕の手を取るマキ。

僕は事態がいまいち飲み込めないが、再び石をひっくり返し始めたマキに促され、ひとまず屈む。身を低くしたら、それまで聞こえなかった川のせせらぎを見付けた。

マキは反面が濡れた石と乾いた石で囲まれ、オセロ盤に乗っているみたい。僕もひとつ、返してみる。

「サワガニ、いた？」

「おい、靴濡れてるぞ」

浅瀬まで伸びた足はすっかり水分を吸い、歩くと鳴いた。その擦れる音が、サワガニを探す理由を聞いてはいけない気にさせる。

「掴まえて食うのか？」

ふたつ目を返し、川へ投げ込む。石は水面を二三次跳ねて、沈む。ちなみに調子が良ければ七回くらいは跳ねる。

「サワガニって食べられるの？」

マキは中腰のまま、こちらへ近付いてきた。

「食うんじゃないのか？」

食う為に探しているとは思っていない。むしろ、食う為に探していないと分かっていたから、そう言った。

マキだって一旦は頷いたのに、目が合った途端、泣き出す。垂れた滴は石を水玉模様にし、切ない匂いが蒸発していった。

「は？　なんで泣くんだよ？」

くたつた襟元で鼻を拭い、明るい声を探されるのに腹が立つ。マキの未発達な喉仏は嘘を付くのに慣れておらず、言葉を妙に震わせるから意味が無い。

それに黙って聞いてやれる程、僕も大人じゃなかった。

「おまえさ、何なの？　何がしたい訳？」

思ったより、ぐっと冷たい言い方になる。このまま立ち去ってもいいが、苛つきが勝った。膝に涙を押し付け、体を折り畳むマキ。僕はその肩を強く押し、悲鳴と共に川へ落とす。

涙を薄めてしまう位の大きな水しぶきは僕にも注がれ、それを冷たいと感じた瞬間、僕こそが泣きたくなかった。

尻餅をついたマキは動けず、一方僕は寒さから来る震えじゃない振動を堪える。

「にいに、大丈夫？」

「うるさい」

「ねえ、こいつ」

何を思ってたか、マキは僕に向かってピースする。

「サワガニピース」

そのピースは最高に無様で、同時に僕から引きずりだす凶器に映る。無意識の内に僕は腹を押さえていた。

「ねえ、覚えてる？ サワガニはキレイな川の中でしか生きられないって」

「知らないし、そんな事」

マキは川の中で泳ぐような体育座りをする。陽の差す水中ならマキでも透明に見えた。

「そっか」

水面を激しく叩き、それから歪んだ笑みを浮かべる。

「サワガニピース」

「だから、何だよそれ」

「海じゃ生きられないサワガニのやせ我慢のポーズ」

これ以上は付き合いきれず、僕はピースを握り潰しながら、マキを立ち上げさせた。

「やめろ」

どさくさに紛れ、マキが透けた素肌を押し付ける。

「気持ち悪い、やめろ」

「にいに！ あたしね！」

「離せつてば！」

「嫌！ 嫌だよ！」

剥がそうとすればする程、まとわりつく。

「にいには渡さないんだから」

「はあ？」

「一緒に帰るんだもん」

胸元を叩かれる。まるで開かないドアをノックするように。

マキからの包容には性的な熱は感じないが、執着心は腰が引けるほど帯びている。

「にいに、あたしはにいの妹じゃなきゃ生きて行けないんだよ」

シャツを手繰り寄せ、出来た隙間に自嘲を押し込む。

「あたし、サワガニと一緒にだね」

くぐもった言葉にはざらつきしかない。僕は視線以外を捕らわれ、右に工場、左に畑、これらを隔てる川に身を置く映像を脳へ垂れ流す。

そして映像の中には一匹のサワガニもいた。サワガニは爪を突き上げ、ピースをしている。僕はそんな彼女に拳を作りたかった。

どうも三角形のバランスが良くない。マキが加わった事でこうもバランスが崩れるものかと考えていると、成美さんからメールが届く。そう、アンバランスの要因はマキだけじゃない。

成美さんは最近マメに連絡をくれる。もちろん、くれるのは喜ばしいが、会うまでには至らない。一方、雨宮からのメールが少ない。最低限のやりとりさえ億劫らしく、電源を落とされてしまう。食って寝て食うのライフスタイルは三方それぞれに引っ張られ、結局僕が体調を崩した。

発熱したと成美さんに送るが、見舞いは期待出来ない。風邪をうつされたたくない、会わないでいい理由を与えるだけ。マキに薬を買いに行かせたら、バイトを早退し看病されそう、雨宮に持って来させると妙な薬かもしれない。よって、こうして一人で転がっているのが最良と言える。熱に浮かされながらも、平衡感覚だけは手放したくなかった。滲む視界を認められず、目を瞑る。と、瞼の裏に張り付く文字と目が合う。

成美さんの働く店は来月リニューアルをするらしい。スタッフが増え、責任も増したと言う。

成美さんの毎日は、出来の悪い後輩のフォローをし、失敗したその後輩を元氣付ける為、食事をご馳走したりする事。食事内容をたまにメールに添付し、実際働いている姿を見せなくとも、イメージさせるんだ。

まず白い手袋をし、シューズケースからバッグを取り出す。サイズや素材の説明をきちんとこなし、値引き交渉されようものなら優雅にかわすのだろう。嫌味のない、控えめな笑顔を浮かべる成美さんはメールから組み立てられる。

けれど、その成美さんには奥行きはない。

ここでやつと眠気がやって来て、考えるのを止めたくなる。どうあれ成美さんが援助を続けてくれればいいし、成美さんと僕にはセックスが残されているじゃないか。切り札にもジョーカーにもなり得るけれど、奥を感じたいならセックスが手っ取り早くて確かだ。

もしかして僕は壊したいのだろうか。いや、壊されるなら先に壊したいだけ。ブランケットを頭から被り、もう考えない。テレビを付けたままだったが成美さんが好きなアニメなので流しておく。そういうえば、狼のマスコットの代わりに貰っていない。

遠くでインターホンが鳴っているような気がする。そのうちドアは勝手に開き、靴を脱がない来訪者がすんなり寝室までやってきた。

「起きてる？」

洗い過ぎたブランケットからヒールが透ける。

「大丈夫なの？」

成美さんは屈み、丸まった僕を撫でてくれた。そんな優しい手付きに見開くと、シヨーツ、それもナプキンの張られたものが映り込む。血と石鹸が混じった臭いが鼻について、夢心地もこれまでだ。僕はスカートの中に手を伸ばす。

熱がこもった空間は指の進入に慌てて閉ざそうとしたが、こじ開ける。成美さんは不本意な姿勢、足を左右に広げた尻餅をつく。

当然、血を流す膣をいじるのには抵抗がある。普段ならしない。成美さんが思いの外、抵抗しないことや、ブランケットの目隠しが妙に興奮させるんだ。

ペリペリとナプキンがシヨーツから離れる音がする。何色か分からない糸を爪で掻き切って、奥へ触れてみた。すると成美さんは小喘ぎ所か、息遣いすら潜め、畳に爪を立てた。

今までの愛人達が喜んできた風に成美さんを扱う。僕にテクニクと誇れるものなどない。

膨らんだクリトリスを湿った中指で転がす。もつと強い刺激を与えたい時はフードからそれを剥き出し、強めに押せばいい。そのうち成美さんは痙攣を起こし、出し入れする刺激が滑らかになる。

「や、やめて」

ここで初めて成美さんは嫌がった。一方、僕はその言葉を待っていたんだ。拒みを合図にし、強弱をつけた愛撫へ切り替える。一番長い指を中で引っ掛けるよう折り曲げ、溜まった液を掻き出す。強く弱く、浅く深く、指を増やしては減らし、成美さんを壁際へ追い込みたい。

顎を反らす成美さん。目を閉じる事で迷わず引いたアイライナーが

見える。その縁取りを消し去りたい乱暴な願望と、一枚布をかみ、モザイクめいた背徳感が僕をより熱くする。こんな気持ち、初めてだ。抱きたいより、壊したい。いつそ壊した方が楽になれるのかもしれない。いつ向こうから壊されるのか不安になるくらいなら。

ついに呻きに似た喘ぎを漏らした成美さん。うつすら滲んだ額に前髪が張り付く。

「どうして？」

こんな真似をしたの、と続けたいのに続かない。僕が言わせない。答えなど簡単だ。成美さんが女で僕は男、それだけなんだ。成美さんも分かり切っているから、泣き出すんだろう。深くめりこむ前歯がルージユを削ぎ、赤みの抜けた唇にさえ吸い付きたいなんて、僕は何が恋しいんだ。何が足りていないっていうんだ。

成美さんはもう快楽を隠さなくなった。濡れるままを受け入れる。だから僕がブランケットを払って抱き締めても、一瞬だけ裏切られた顔をするだけ。

実はこの一瞬こそが最果てなんでしょう。僕は他人事みたいに気付いてしまう。

どうやらマキが帰宅したらしい。僕を呼びながらキッチンを抜けて来る。初めて耳にしたであろう僕の名に成美さんは身を固くした。そんな成美さんの上で僕は人差し指を唇へ押し当て、微笑む。

人差し指は複雑な臭いがした。

「にいに、何やってんの！」

ノックもせず開けておいて、マキはすぐ僕らを剥がしに掛かる。成美さんは体を丸め、思い出したみたいに咳込んだ。シミだらけの体が酸素と世間体を取り戻す為だ。自分だけ着衣の乱れを直すと、僕の下から逃げていく。

マキに背中を引っかかれ、彼女を見やる。

「何だよ？」

「な、何だよじゃないよ！ こんな事して」

「こんな事って何？ セックス？」

表現に身を震わせたのは成美さんも同じ。この部屋にはそういう臭いが充満しており、壁へ寄り添ったとしても無駄だ。そうやって肩を抱き締め、無理矢理されたと誤解させたいなら、僕は幾らでも証拠を並べてやる。マキ、僕、成美さんを繋ぐ三角形の中に。

とりあえず僕もシャツを羽織り、マキを押し戻す。力が入らないマキはそのまま座り込む。手にしていた袋から真っ赤なリンゴがこぼれる。

「にいに、顔色悪かったから。風邪引くと一重になるから」

リンゴを見つめ、マキは呟く。

「で、バイトを早退したんだ」

「あたし、どうしても気になっちゃって。先輩も帰っていいって言っから」

「単にお前が邪魔なんじゃないの？ 帰ってくれた方が仕事はかどるとか？」

と、背後で音がする。マキと二人で振り返ると、似付かない兄と妹に成美さんが嫌悪を露わにしていた。

「こいつ、妹ですよ」

顎でマキを差す。

「う、……そう、なの」

嘘と言い掛け、頷きに変える。壁伝いに立ち上がり、心を庇いたいのか、ボタンを握り締めた。

「似てないでしょ？ 母親が違っんです」

「じゃあ、あなたは母親似なの？」

質問の意味に迷う。けれど成美さんの目は真剣だ。

「いえ、僕は父に似ています。顔だけですけど」

「そっか」

どうやら答えを間違ったらしい。明らかにトーンダウンする成美さん。と、マキが口を挟んでくる。

「それは、あたしがブスだって言いたいんですか？ あたしが男顔

だつて言いたいんでしょう？」

リングを握り締めたかと思つたら、それを成美さんへ投げ付けた。どん、鈍い音の後で、一連の行動が現実として僕に伝わる。幸い、成美さんに当たらなかつた様だが、成美さんは僕に抱き付いてくる。それはもちろん、悪意のある包容。腰に回された指先は熱い。

雨宮なら分かるが、成美さんがこんな大人気ない事をするのに、僕は正直引いてしまう。事実、腰も引けている。それでも構わず引き寄せ、熱を押し付けてきた。

「いに、雨宮さんに言いつけてやるんだから！」

「雨宮さん？」

マキと成美さんの目線が同じ高さになる。

「いにの事が好きな、すごい美人。アイドルみたい人」

雨宮を武器にするマキ。

「どついう事？ 浮気してるの？」

「別に。成美さんだつて、結婚してるじゃん」

「こ、これは」

マキが二投目を握つたのが見え、僕らは自然と距離を置く。

成美さんは髪を透くが、指摘されたリングに引っかかり、余計に絡まってしまつ。

「成美さんが構ってくれないからだよ、雨宮とはそんなんじゃない」

困惑していた成美さんが、言葉に冷やされていくのが分かる。僕は成美さんが悪い、成美さんの所為だつて傷つく。

「ごめんなさい」

だから成美さんから謝る。

「いいんだよ、寂しくさせないでね？」

伸ばされた手に頭を押し付けた。犬や猫でも撫でる風に成美さんは僕を慰める。そしてバッグから薬と封筒を取り出す。リンゴよりずっと役立つそれらを、マキに見せつけながら受け取った。

怪訝に眉をしかめたマキは封筒の中と目が合い、やっと僕らの關係を察した。そして今度は成美さんがマキを見下ろす。リンゴを踏みつけて、腕を組む。

「お兄さんには金銭援助をしているの」

「それって援助交際？」

「まあ、そう思ってくれても構わないけど」

「それだけじゃないって訳？」

成美さんはここで僕を見た。

「彼が私を好きなのよ」

それは何処かで聞いた台詞でもあった。マキも雨宮と比べるのが忍びないからか言葉を失っている。

しかも残念な事に僕らの沈黙を言い負かしたと判断し、笑い出すからもつと気まずい。

「じゃ、また連絡するね」
「うん、待ってる」

そう応えるのが精一杯だった。優越感を漂わせた背中が消えるまで僕は俯く。途中、振り返ったりしませんが、必死に願っている。

そしてドアが閉まったなら、笑い出す。

僕は賢い成美さんが好きだった、自分の魅せるべき部分を知っている成美さんが好きだったのに。本気で裏切られた気分になってリングを握り締める。八つ当たりをされると分かり、マキが曖昧に微笑む。

「あの人、可哀想だね」

「は？」

「雨宮さんも可哀想、あたしもいにもみんな可哀想なんだよ」

リングを剥いてくると言い、マキは部屋を出て行った。少ししてキッチンから聞こえる嗚咽。みんな可哀想と言いつつ、自分以外を哀れんで泣いている。もしかして、それは気持ちいい事なんだろうか？ だったら、僕は誰を思って泣こう。

ふと、母が過ぎった。

歯医者の前で雨宮と待ち合わせる。虫歯が痛むらしく、電話の聲は消え入りそうだった。

成美さんから金を得たものの食欲がわかず、僕は駅前で花を買う。その際、店員に恋人へ贈るのかと聞かれ、曖昧に傾げたら首の筋を痛めてしまった。

世間を斜めに見ると、誰もが寂しそうに映る。陽は傾き、影がおいでおいでと手招くみたい揺れている。

「お待たせ」

雨宮のパンプスが視界に入る。値が張るものだろうに、踵が潰されていた。

「待った？」

「生憎、一時間くらいは平気なんだ」

「ふーん、誰かさんのお陰？」

「妬いてるの？」

「まつさか」

笑った拍子に折れた八重歯が覗く。ああ、また殴られたんだ。雨宮は隣に腰掛け、流れる人々を眺め始める。

「前歯をやられる前に別れなよ」

「……妬いてるの？」

一呼吸おいて答えた。

「まつさか、前歯は保険がきかないんだぜ？」

雨宮は少しだけ驚いてから、静かな微笑みに戻す。よく見れば歯だけじゃない。頬や目も腫れ、完璧な印象を崩す。僕が斜めから見ているのもあるが、雨宮の迫力は薄れる。僕らの視線は再び、大通りへ向けられた。

「で、その花はくれるの？」

「欲しい？」

「赤いバラなんて、スティックサイダーが渡してるのしか見たことないけど」

「スティックサイダー？」

「知らないの？ 前にキーに付けてたじゃん」

「あー、あの狼」

スティックサイダーって名前だったんだ、とは言わなかった。回復したはずの喉が億劫がった。

話が続かないなら手を繋ごうとすると、雨宮は何かを握っている。

「何、それ？」

「星の欠片」

手の平には爪痕と折れた八重歯。

「わたしの田舎はね、折れた歯を屋根に向かって投げるの」

「そうすると星になって願いを叶えてくれるんだろ？」

「あ、もしかして知ってた？」

「うちの田舎でもそうだったから」

雨宮から消毒の香りがする。そろそろ植木に紛れて座るのにも飽きて、僕は雨宮の腕を取る。恋人が付けた痣通りに指を重ねてやった。

「指が長い奴は神経質なんだって」

雨宮がそのまた上に手を重ねてきた。雨宮の指は男等より、少しだけ長い。星の欠片と一緒に花束も持てる。

と、今から治療に向かう少年が雨宮を指さす。隣の母親が慌てて制し、雨宮は笑う。まさに花が咲いたみたいだな笑顔で、少年は恋に落ちていく。

「ねえ、星の欠片を投げに行かない？」

先に助手席に座られてしまい、仕方なくハンドルを取る。

「今から？」

ルームミラーを調整し、座席も後ろへ動かした。何故か雨宮はこの仕草を嬉しそうに眺める。

「だってマンションじゃ投げられないもん」

「じゃあ、次は野球選手と付き合っただけで貰えばいいじゃん」
「って言うか、わたしも妹に会いたくなっちゃったんだ！」

シートベルトへ器用に絡まる雨宮。

「死んだんじゃないのか？」

「うん」

「じゃあ、帰っても意味ないだろ」

「会えるよ」

首に巻き付くベルトを見る、顎を引く。

「今時、心中なんか流行らないぞ」

「あ、怖いんだ？」

「雨宮は怖くないのか？」

対向車に照らされて、色素のない髪が透き通っている。雨宮は珍しく考えていた。膝と沈黙を抱き、流れる景色に答えを探す。

「怖いに決まってるじゃん、バカ」

やっと答えが導かれた時には、車はインターへ差し掛かっていた。

「何処に行くの？」

「星の欠片を投げに行くんだろ？」

「うん」

素直にETCカードを差し込む雨宮。

「山田太郎って」

カードの裏へ記入されたサインをつい口に出してしまった。その名に雨宮は歯の痛みを思い出し、リュックから薬とサイダーを取り出す。

「これ、あげる。おまけで付いてたんだ」

身を乗り出し、ウインカーにキーホルダーを釣り下げてきた。腹に柔らかな胸の感触を感じる。

「ステイックサイダーだよ」

バラを抱えた狼が居る。ちなみに僕のバラはさっそくトランクへ仕舞われた。雨宮のトランクには様々なものが詰められており、一度入れたらもう取り出されないのだろう。バラの中に埋もれたデイベアは目を開けたまま眠っていた。

雨宮は喉を鳴らし、サイダーを飲む。ギアの代わりにキレイな後頭部を撫でたら、ゲップをされた。そのまま僕の股に頭を預け、踏み込むアクセルを見守る。

きちんと温度があつて、息する度に肩が上下していても、僕には雨宮が生きていると思えない。この雰囲気は成美さんとの突き当たりを感じた時に似ている。僕はやっぱり他人行儀で、とうとう干上がってしまった雨宮を見下ろすんだ。

これまでの雨宮は容器に数ミリの膜を張った空っぽだった。膜は無色で底は見えるけれど、剥き出しじゃ無い。

「トキちゃん、元気？」

そう言われ、マキのピースした姿が浮かぶ。もしかしたら、あのマキのハサミが雨宮の膜を破ったのかもしれない。けれど、雨宮から流れ出たのは血ではなくサイダーだと思う。サイダーの気泡はかすかな痺れを起こし、弾け、消えてしまっただ。ねえ、雨宮はその時、手を伸ばしたの？

暗闇の高速道路は何処までも続いていく気がした。気付けば雨宮は寝息を立てている。転がったペットボトルには三センチ位の飲み残しがあり、波立つ。

昔、誰かから聞いたことがある。人間は三センチあれば溺死出来るって。なんでも詰め込み、凍らせたがる雨宮が溺死を選ぶとは考えられない。が、白い肌がふやけ、それをめくったら何が残るのだろう。僕は肌で何を包み隠していたんだろう。

それを最初に知るのは、たぶん母。僕はこれから母に会いに行く。

立ち寄ったサービスエリアにはプラネタリウムがあった。サイダーを抱えた雨宮は案内板をじっと見ている。

「見たいの？」

「うん、でも今の時間はやってないみたい」

僕は返事をせず、煙草で空を指す。プラネタリウムが必要なのが分からなくなる星空は広がる。大きな月も浮かぶ。

二人でボンネットに腰掛け、ぼんやり灯る自販機と向き合う。

「ところで何処に向かっているの？」

「星の欠片を投げられる場所」

鼻で笑って雨宮の前髪は舞う。

「わたしの実家、逆方向なんですけど」

「別に雨宮の地元じゃなくても、願いが叶うって迷信がある所なら何処でもいいじゃん」

すると納得したらしい。特に文句を言うでなく、ペットボトルを飲む。

「君の地元、何が美味しいの？」

「今ならなんでも旨いよ」

「もしかしてお腹空いてるとか？」
「もしかしなくても空いてる」

サービスエリアに着くなり、カーセックスを強請られた。それに
応じた僕の次なる行動は決めてある通りだ。

「セックスしたら、次は食う」

「まだそんな事を言ってるんだ」

「別にいいだろ？」

「まあ、好きにしたらいいよ。自販機でカップラーメン売ってるよ、
それにしたら？」

ジューズのお釣りを差し出してくる。

「わたしは塩がいい」

「結局、雨宮だって食べるんじゃない」

「並んで食べたら、なんか映画みたいじゃん」

映画、と喻えられ、成美さんが過ぎる。あれから成美さんから連
絡は無い。仮に捨てられるなら、何かしらのアクションがあるはず。
それこそ、お別れの台詞を用意していそう。このままじゃ二人は駄
目になるとか、この関係が僕の為にはならないだの、そんなニュア
ンスで。

僕は味噌ラーメンにする。機械に備え付けられたお湯を注いでい
ると、雨宮が走ってきて珍しそうに覗き込む。短めの割り箸を握り
締め、湯気の方こう側を探った。

「ほら、自分ののは自分でやれよ」

雨宮のカップを放る。

「わたしね、硬めが好き。ほら、この肉」

手際よく蓋を開け、乾燥した四角い肉をひとつ摘むと見せてきた。

「これがふやけない内に、噛みしめるの。ぎゅー、って」

膝の上にカップを乗せ、踏ん張る雨宮。ぎゅー、の意味を教えようとする。

「で、味が染み出ちゃった後に、カスみたいのが残るんだ。それも好き」

月に肉を重ねる雨宮。

「そんなの、どうでもいい」

背中を向けようとした頃には、雨宮自身もどうでも良くなっており、無表情でお湯を注いでいた。ラインぎりぎりを目指し、慎重に満たしていく。

僕の手は熱で温められ、そんな雨宮の背を押してやりたくなる。ぐっと堪える気持ちがかップへ爪を立てさせた。

運転席に僕、後部座席にうつ伏せた雨宮がラーメンを啜る。時折、鼻も紛れて啜る雨宮は泣いているのかもしれない。湯気でフロント

ガラスが曇り、車内に閉じ込められた気分になった。

「ねえ、さつきから携帯震えてるよ」

「食ってるし、出たくない」

「妹からだっいたら出ていい？」

伸ばされる手に携帯電話を握らせる。が、すぐさま投げ返された。足元に見知らぬ番号が光る。

「誰、それ？」

「知らない。それにマキの番号も知らないし」

「じゃあ、妹かもしれないじゃん」

再び手にしようと乗り出した所で着信は途絶えた。雨宮は運転席と助手席の間に挟まり、足をばたつかせる。ふいに、雨宮ならそうして何処でも溺れられるんじゃないかと疑ってしまう。

「今夜はここで寝て、明日プラネタリウムを観ていかない？」

「え？」

「観たいんだ、プラネタリウム」

近い距離から横顔を探られ、キスされた。

「別にいいけど。その代わりに、手を繋いで寝てもいい？」

突然ドアを開け、食べ掛けを投げ捨てた。そのまま隣の席へ滑り込むと手を差し出す。よく分からない交換条件だが、それもいい。僕もカップを捨てようとしたら、背中にくっつかれる。

「ねえ、一口ちょうだい」

「スープしか残ってないけど」

雨宮は構わず飲み干す。

「しよっぱいや」

「何がしたいんだよ？」

「何にもしたくないよ」

僕の座席を倒そうと、下半身にまとわりつく。

「今日はもうしない」

「分かってるってば」

素直に目を瞑ってみせたので、手を優しく繋ぐ。

車内はラーメンの匂いに包まれている。香りのしない空気を求め、喉を反らした僕は確かにワンシーンだ。映画じゃなく、アダルトビデオだけ。

と、雨宮が笑う。

「何を笑った？」

「うーん、今は笑う所かなくて」

「鋭いな」

「じゃあ、わたしに刺さって死んじゃえばいい」

ぐりぐり、頭を押し付けてくる。

「おい、ボタンを舐めるなって！ 汚い」

悪戯にボタンを含んで、音を立てる。僕は這い上がってくるキスに備え、しっかり目を閉じた。

僕は目覚めるなりサイダーを飲み、プラネタリウムへ向かう。車を降りると未だ朝の気配が残っており、雨宮が捨てたラーメンにも水分がある。それらを蹴り飛ばすのはパンプスで、ダンスをしてるかのようない機嫌な音をさせる。

「はしゃぐな、転ぶぞ」

「だって考えてみたら、プラネタリウムなんて何年か振りだもん」

浮かれる雨宮をトラックの運転手等が羨まし気に眺め、その後で僕を睨む。

「ほら、早く行こう」

「折角だから見せつけてやればいいのに」

「分かってて騒いだのか？」

雨宮は肩を竦めただけで、それ以上言わない。ただ、派手にデコレーションされたトラックと並ぶ雨宮は透明。透き通って見えた。それは擦れ違う人が振り返る程で、思わず呼び止めてしまう。

雨宮はすぐに振り返り、手を振ってくる。

「ほら、チケット売り切れちゃうよ」

駐車場の有様から、そんな事はないと断言できる。むしろ、無くなってしまふのは雨宮本人かもしれない。どう表現したらいいか迷うが、今日の雨宮は死を漂わせている。きっと、意識してやってい

るんだ。僕は段々と腹が立ってきて、雨宮の腕を掴んだ。

「やめろ」

「何を？」

「いいから、やめろ！」

低い声で告げる。

「そういうの好きじゃない」

「同じ事、言うんだね」

「山田太郎か？」

「違うよ、妹と」

雨宮は脇の売店へ入っていく。いらっしやいませ、おはようございます、と元気な挨拶が無表情の背中へ吸い込まれる。一直線にドリンクコーナーに向かうと、そこから手招きをした。僕が入店しても、レジから挨拶は聞こえない。

「雨宮……」

声を遮れる。

「例えばさ、わたしが今日死んだとするじゃん？」

扉を開け、サイダーがよく見える位置に屈む。

「で、そう言えば今日はいつもと様子が違ったとかって話になるの。元気が無かったとかさ、妙にはしゃいでたとか」

スティックサイダーのキーホルダーが付いているサイダーを手取る。

「それ、成美さんから貰ったやつ」

「じゃあ、こっちにしよう」と

バイクに跨るポーズを選んで立ち上がった時、雨宮はくらりとバランスを崩す。

「おい、大丈夫か？」

「平気、幸せ過ぎて立ちくらみがしただけ」

どうしようもない嘘を付く雨宮は蒼白い。

「君にも、そんな言い訳を残してあげなきゃいけないのかなって思っただ」

「は？」

「猫は死ぬ前に姿をくramsすんだよ」

僕の手を払う、雨宮。

「君はわたしが居なくても生きて行ける？」

雨宮の手を取る、僕。

「行けないって言ったなら、一緒に行けるの？」

「うーん、どうだろう」

即答された。けれど次に目が合うと、雨宮からは何も漂わなくなっていた。

「サイダー買って来るから、チケットよろしくね、あ！」

僕を通り過ぎようとし、慌てた声を上げる。見ると雨宮は頬の横で手を握っていた。

「にゃーお！」

雨宮は鳴いた。

大きな傘を広げた形をするプラネタリウム。最新鋭の機械を導入したものの、今は相合い傘状態。雨宮はどの席が一番見えるか比べに比べ、結局僕の隣に落ち着く。

「傘みたい」

僕もそう思ったと言つと、白い天井を揃って見上げた。

「でも、あそこに線があると閉じられない傘になっちゃうね」
骨組みをなぞる白い指、僕はそれを黙って追う。開演を知らせるアナウンスが響き、姿勢を正す雨宮。視線に気付き、微笑む。
落ちていく照明の中、雨宮の笑顔が浮かび上がる。

「なあ、雨宮」

「し！ もう始まるよ！」

「サワガニピース」

ピースの隙間から沈黙が突き抜け、星が生まれると同時に息をつかれた。

「なにそれ」

「海じゃ生きられないサワガニのやせ我慢のポーズ、かも」

「だから、なにそれ。にしても、キレイ」

いっばいに煌めく星色。そこに秋の大三角の説明が添えられる。

秋の大三角は南の空低くにある三つの星を結んだもの。うお座のフォーマルハウト、くじら座のデネブ・カイトス、ほうおう座のザウラク（ほうおう座 星）で出来ている。

フォーマルハウトは一等星、デネブカイトスおよびザウラクは二等星だが、周りに明るい星がないためよく目立つ。

先日もマキと一緒に観た為、星の名がすんなり入る。一方の雨宮は耳を塞いでしまう。

「やだ、せつかくいい気分なのに！ 勉強させられてる感じ」

膝を抱える。肩を揺ると、舌を出された。

「こうして観てる方がキレイだよ」

抱えたまま座席を最大に倒す。鼻歌を口ずさみ、星を自分の思いのまま星を繋ぐ。

「ねえ、かに座はあるのにサワガニ座はないんだよね？」

また、どうせ答えの要らない質問。応えないでいると、ふいに頬を撫でられた。

「海じゃ生きられなくても、宇宙なら生きていけるかもよ」

いつか流した涙の痕をなぞってくる。

「やめろ、くすぐりたい」

「サイダー飲む？」

僕は黙ってペットボトルを含む。肘掛けを越え、雨宮が胸にしがみついてきた。頭を撫でると促され、髪は指からすり抜けていく。それを何度も何度も繰り返していくうちに眠くなってくる。

「おやすみなさい」

優しく言われ、そっと目を閉じた。

次に目が覚めた時、雨宮は居なかった。

離婚の条件のひとつに、母は住み慣れた街を離れるとある。母の移転先は誰も教えてくれず、また聞こうとも思わなかった。何故なら僕には母が越した場所が何となく分かっていたから。

インターを降りたら山で囲まれた景色が広がる。窓を開け、ラジオから流れる悲しいニュースを逃す。ギアを一段上げ、アクセルを踏み込んだ先にはコンビニがあり、点滅信号を左折すればホテルが見えてくるはずだ。
きつと、母はこのホテルで働いている。

ゴルフ場が隣接している為、ホテルのロビーにはゴルフウェアを着た客が多い。カラフルな色彩に混じりきれない僕の装いは隅へ弾かれ、絵画を背負っている。

「お待たせしました」

部屋を取るでなく、フロントに来るなり母の名を尋ねた僕にも丁寧な対応がされる。

「お尋ねになられました従業員ですが、先月からお休みを戴いてます」

女性は書類を確認しつつ、申し訳ないと続けた。耳に付ける機械

から指示が流れるのだろう。大きな目は瞬きが多く、視線も泳ぐ。

「プライベートな事はお答え出来ませんが、お言付けは承ります」

「母は会いたくないと言ってるんですね」

「あ、いえ、そういう訳では……」

慌てて、胸にあるマイクへ告げる女性。

「どつやら息子さんのようなんですが……あ、はい」

思えば女性は従業員リストを確認せずとも母の名に反応を示し、判断を責任者に仰いでいた。

「お待たせしました」

今度は男性がやってきて、頭を下げられる。ゆっくり上げた顔には責任者と書いてあり、貫禄が滲んでいた。女性は責任者の登場にそそくさと場を離れ、僕もとりあえず会釈する。

「今日こちらへは何で？ お車ですか？」

「はい、途中までは」

「途中？」

「あとはヒッチハイクとバスで」

「なんだか映画みたいですね」

白い手袋を添え、微笑む。

「あの」

「彼女に子供が居たのは聞いていました。もしかして、お父様似ですか？」

近くのソファアを促し、通り掛かった従業員に珈琲を用意させる。上品なスカーフの下にあるプレートには南野と記され、どうやら支配人らしい。さっそく運ばれてきたカップを寄せ、足を投げ出してやった。

目尻に沢山の皺を刻む、一見は優男な南野だが、名前からして厄介そうだ。

「煙草いいですか？」

「いや、申し訳ない。ロビーは全面禁煙なんだ」

正面へ腰掛けた途端、口調がくだけたもの変わる。

「煙草は止めた方がいい、体にいい事がひとつもない」

「母さんも吸ってませんか？」

「だから、言ってるんだ」

途端、僕のソーサーが揺れた。

「会っていくといい」

名刺の裏に病院名が綴られる。その間もソーサーは揺れ続け、描かれたバラだけが無邪気な鮮やかを保つ。

「母の姓は南野さんになっっているんですか？」

「いや、君と同じだ」

「……再婚しなかったんだ」

「君のお父さんはしたんだってね」

カップを置いて、静かになるテーブル。

「だから、彼女は再婚しなかったんだろう」

南野の視線が玄関に向かう。丁度、団体客がバスから降りてくる所だ。

「悪いね、こんな田舎のホテルでも忙しいんだ」

「いえ」

「暫くこちらに居るなら部屋は用意しておくよ、遠慮なく泊まっていけばいい」

旋毛を見せて立ち上がる南野。綺麗事を言いながらも噛みしめた唇を隠したいんだ。

「もし、僕が息子だって偽ってたらどうするんです？」

僕も席を立つ。南野は汚れたハイカットからシャツへと僕を確かめ、それから肩を竦めた。

「実は見間違えも出来ないくらい、君を見に行っただよ」

言い終え、南野は背を向けた。逆に僕は俯きカップの中へ視線を沈める。サイダーと違い、珈琲じゃ底が分からない。深い、深い闇のようで鏡でもあって。鏡の中の僕は語る。母は南野と愛人関係にあった事を。

母はよく僕を連れ、このホテルに食事をしにきていた。もちろん、父には内緒。ホテルで食事をした日は父の夕食を揃って残すのが決まりで、露骨過ぎない食べ残しをすると母は褒めてくれた。

南野は当時、給仕をしていたと思う。父の料理は受け付けなくとも、南野が提供するものなら何でも美味しくそうに食べる母。明らかにな心変わりを前に、僕になす術など無い。

で、今の南野は客一人ひとりに笑顔を振り撒く。僕は彼の視界に入らないよう、タクシーへ乗り込む。行き先を伝えた後は沈黙を構え、窓の向こうを眺めた。

先ほど逃した悲しいニュースは緑色になったか、それとも空色になったのか。見渡す限り、二色しかない世界。二つの色を区切る為に道路がある、そんな錯覚を起こすくらいだ。

「お客さん、良かったら道の駅がありますよ？ 寄ってきますよ？」

「……見舞いに持っていけるようなものある？」

戸惑いつつ話し掛けてきたのが分かる。

「うーん、月並みですが花はあったと思いますよ！」

「花、か」

建物が見えてくるとスピードは緩まり、答えを待たれる。観光客らしい数人が見受けられるが、特別そそられる要素もない。ありきたりな道の駅と言っている。

「あと道の駅を下りた先に沢がありましたね、とってもキレイですよ」

「沢……」

「よし！ じゃあ、寄ってみましょう！」

運転手は駐車場へ停車してから、こちらに頷いた。

「こちらで待ってるんで、ゆっくりして来て下さい。あ、メーターは止めておきますから心配しないで下さいね」

ドアが勝手に開く。追い出されるみたいな下車と商品整理をする店員の視線がぶつかり、ぎこちない会釈が交わされる。

「あの、沢ってありますか？」

雰囲気に飲まれ、仕方なく聞いてみる。

「沢？ ああ、この階段を下った所にあるよ」

店から出て、階段を示してくれた。場所はうつそうと草が茂っており、言われないと階段とは気付かない。覗き込んで沢を確認してみると、水面がきらきら輝く。朽ちた木の段を慎重に降りて行き、むせかえる緑の香を目一杯吸い込んだ。

「お客さん、タオル用意しておくからねー！」

店員が手を振り、店へ引っ込んでいく。その言葉が僕を裸足にさ

せ、熱された石を飛び越えさせる。
石の中には熱いだけでなく尖ったものもあって、僕を決して歓迎しているのではないと告げられた。
片足で跳ね、もう片方は裾を捲る。投げ捨てたスニーカーが上を向いたのを確認したら、勢いよく浅瀬へジャンプする。

大きな水しぶきは顔まで届き、水道水とは違う感触が僕の熱を奪う。体の芯が冷える、そんな感じ。
僕は腕を組み、寒気に耐えてみる。こうすれば冷静な思考を取り戻せるかもしれない。

と、赤い背のカニが視界を横切っていく。

サワガニは燃えている。

そこは療養所だった。庭では医師を名乗る男を囲んだお茶会が開かれ、花束とビニール袋を持って余した僕がテラスから投げ捨てても良いか尋ねている。けれど車椅子に乗せられた母は答えない。

「今日は息子さんが来てくれて、嬉しいねえ？」

看護師と名乗った女性が奥からティーカップを二つ運んできた。ひとつは僕に、もうひとつは自分用。母には呼び掛けるだけ。

ウッドテイストの空間は懐かしさを覚えると同時に疎外感を伴う。僕が居てはいけない、優しい雰囲気で包まれていた。居心地が悪かった。

「ローズティーよ、お口に合うといいのだけど」

正面に腰掛け、微笑む。何故か医師を始め、この建物自体から消毒液の臭いがしない。

「あら、苦かったみたいね」

僕の訝しげをお茶の所為にし、女性は笑みを保つ。タクシーを降りるなり「おかえり」と言われ、用件を聞かれた以外何も聞かれなかった。疑う素振りひとつせず、母との再会を演出してくれる。

どうやら僕の知らない内に母はおかしくなったらしい。数年振りの母を前に、まずそう思う。母は一人で歩けなくなつて、お茶も飲

めない。痩せ衰え、しわしわに乾いていた。

母に一体何が起きたのか、むしろ何か起きてなければこの有様は無いだろう。記憶に生きる母を今の母に重ねようとしても、昔が今を覆ってしまう。

これでも再会したら、何を言っただろうか考えた。でも顔を見たら何を言っただいいのかわからなくて。言葉には出来なかった。

「その花、来る途中の道の駅で買ったのね」

「ステイックサイダーもバラを持っていたから」

「ああ！ あのアニメ、おばさんも好きよ」

意地悪に返したつもりが、身を乗り出される。

「最近、サイダーのおまけになってるみたいなんだけど、炭酸が苦手なの」

ねえ、母に同意を求める。

「そんな事言っても、母さんには分かりません。事故？ こんなになつたの」

付き合いきれず席を立つ。サイダーを取り出し一気に飲み干せば、全てが気泡となって弾ければいい。

雨宮にも逃げられ、一体何をやっているんだ。

「お母さんに会えば、現状を変えられると思ったのね」

倒した椅子を直す横顔が厳しさを張り付ける。気付けば庭から様々な形をした視線を向けられていた。

「あなたはお母さんと暫く、向き合っべきね」

「いえ、帰ります」

「何処に？」

此処にやってきた理由を訊ねたように、質問される。

「何処に帰るの？」

繰り返され、単純にアパートと切り返すのは子供っぽく思えた。と、着信音が響く。何度か鳴らされている番号、やっぱりマキだろう。構わず通話ボタンを押す。

「もしもし、南野です」

回線が通じるなり、こちらの声を待たない、慌てた口調が飛び込んでくる。

「管理人の南野です」

「あ、ああ」

意外な相手に着席する。

「今、大丈夫ですか？」

「もしかしてマキの事とか？」

「ええ、まあ」

マキの事だ。一日留守しただけでパニックを起こすに違いない。南野に泣きつき、連絡を取らせるくらい知恵は流石にあるのか。鼻で笑ってやった。

「あの、お兄さんが留守中に男性を部屋へ招いているみたいで」

南野はますます早口になる。

「いや、年頃の子だし恋人って言うならいいんです。でも、マキちゃんも男性を次々部屋に入れてるみたいで」

「はあ？」

「本当なんですよ！ 昨日からひっきりなしなんですってば！」

南野の発言に意味を上手く乗せられない。言葉等は僕を引っかくみたいにザラつき、苛立たせる。

「マキちゃん、大丈夫ですよね？」

追いかけられない情報が頭痛を引き起こす。重くなった頭を抱え、前髪を握る。

「何かあってからじゃ遅いんです、早く帰ってきて下さい」

「そんなに心配なら、管理人の権利で部屋に上がり込めばいいじゃないですか？」

語尾が自分でも驚く程、乱暴になってしまった。南野もそれで我

に返ったのか、深呼吸する。すー、声にした吐き出しに僕の視界が曇る。

「とにかく、一度帰って来て下さい」

最後はゆっくり丁寧に告げられる。思わぬ所で女性への答えが出てしまう。会話の内容は漏れていた様で、僕のおかわりを注ぎながら女性は頷く。

「それで帰られるんですか？」

「え？」

「アパートに」

なみなみカップを満たして顔を上げた。帰らなくてもいいと含みを持たせた笑顔に、試されている気分だ。

「結局の所、お母さんにとって息子さんとの触れ合いが、一番の薬なんですよ」

「母は直るんですか？」

言っつて、僕は口を湿らす。女性もカップを寄せる。つまりそれは僕次第という合図だ。

今、アパートに帰るのは正直嫌だ。

南野から知らされた現実には信じられるものの、思わずマキに裏切られたと感じてしまう気持ちを何とかしなければならぬ。

マキがどうなるかとそれはいい。僕への当てつけで男に抱かれていると考え、優越感を得ようとするのが問題なんだ。

自分へ絶対めいた好意を持っていたはずの存在が、別の相手と関係し腹を立てる。この不愉快は独占欲からやってくるもので、実は愛情でもある。とか、これじゃ成美さんが好きな展開じゃないか。そっか、僕は生きているんだ。今更、実感する。実感して納得する。

「いらっしやい」

白衣を翻して男性がやってきた。

「先生、病院にいらっしやいはないですよ」

カップを用意しようとする手元を制止し、僕の鼻先で指を鳴らす。

「何の真似ですか？」

「知らない？ ラッキーって意味だけど」

遠目で見た印象より、ずっと若い。癖っ毛に似せたパーマや身に付けているもの全て、白衣まで似合う。まるで隙の無いファッション。袖のボタンさえ計算され、開けられていた。

「ご覧の通り、ここは年上の女性が多くてさ。同年代と話が出るのはラッキー」

眼鏡の縁を上げ、目尻は下げる。

「で、ここに残る事にしたならバイトしてかない？ バイト！ こ

「こには話し相手が不足してるんだ」

男は騒いでおきながら、袖へ視線を落とすと時刻を取り入れた。

「いけない、これから予定があるんだっけ」

「あら、やだ！ もうこんな時間なんですわね！」

二人は同時に立ち上がり、僕の腰も浮かせた。

「また来てね」

母の車椅子を押す男性。管で繋がれてない方に乗っ取り、母の手でバイバイしてくる。女性はそんな男の背を急した。

「ばちん、と大きな音がする。」

「やだなあ、痛いじゃないですか！」

「先生が子供みたいな真似するからですよ！」

「男はいつまでも子供なんです、女性がいつまでたっても女性なのと同じです」

と、男の目が僕を射抜く。

「そう思いませんか？ 女性は結婚して子供を生んでも、歳をとって病気になるっても、死んじゃうまでは女性なんです」

「じゃあ、死んだら何になるんですか？」

「……さてね、やっぱり女性なんじゃない？」

会話は終わりだと、僕らの間に白衣が翻る。

ホテルに帰ると南野は他の客と変わらない「おかえりなさい」を告げ、部屋を与えてくれる。何故、303号室なのかと尋ねたら、特に理由はないと。たぶん、嘘だろう。

18

五階建てのホテルは最上階に温泉とレストランを併設し、四階が宴会場。303号室は建物の中心に位置する。母はこうした真ん中が好きだった。心臓になれた気がするから好きだって言っていた。

室内は落ち着いた趣と言うより、必要最低限が揃った印象。流石にビジネスホテル程、さっぱりはしていないが、花ひとつ活けていない。カーテンを開けると山々が太陽を砕く所で真っ赤に染まっている。

僕はそれをベッドへ腰掛けながら見守った。

「花瓶と、これを飼える容器ってありますか？」

夕食を一緒にどうかと誘われたのは十時を回った頃だった。レストランへ行くと和洋折衷な余り物が並べられており、バラやサワガニはテーブルのバランスをより崩してしまう。

「サワガニ？」

「掴まえたんです」

「もしかして、食べるつもり？」

さっそく奥から、もう使う予定がないと言う小鉢を持ってきてくれる。

「花瓶は後で部屋へ届けるよ」

一方、香りの強いバラは隣の席へ置かれた。風呂場に放っておいた為か、花びらが減ってしまう。

「サワガニってどんな味がするんですかね？」

「こんな小さいのは味なんてしないよ、触感だけでしょ」

ビニール袋の水を鉢へ移す。サワガニは最後に摘まれ、中央へ落とされた。

「サワガニはキレイな水の中でしか生きられないって、海じゃ生きられないらしいです」

「へえ、そうなんだ」

南野はおしぼりで手を拭い、それでは足りないのか厨房へ入っていく。そこから強く流される水の音がする。

少しすると戻ってきたが、シャツの袖や裾は濡れていた。

「でも、何処でも生きられるより、ずっと楽なんじゃない？ 逆に海へ行けば死ぬるって事なんでしょう？」

「は？」

「サワガニです」

「あ、ああ」

料理を均等に取り分ける南野。

「確かに余り物だけど、これらは新作メニューなんだよ」

「南野さんが作ったんですか？」

「いや、作ったのはシェフ。自分はレシピを提案しただけだよ」

ふと南野はナイフを握る手元を見つめる。

「彼女の様子はどうでした？」

「あれは事故ですか？」

「故意にしたとでも？」

僕としては南野を責めたつもりは無い。事故に遭ったから、あんな状態になったのかを聞きたかったただけだ。それを南野は後ろめたさがあるのか、食って掛かる。

「どうして母があんな状態になったか、僕は知りませんが」

「嘘だ！ 知っているから、此処へ来たんだろ？」

テーブルを叩き、サワガニが浮く。

「本当に知りませんってば」

僕はそれからは黙って、食事に専念する。南野も震える口にパンを押し込む。

「正直、君が来た時、脅されるのかと思ったんだ」

顔を上げると、目を反らされた。

「疑って、ごめん」

「どうして謝るんですか？ 理由を知ったら脅すかもしれませんよ？」

スプーンに熱が伝わり、アイスクリームへめり込んでいく。かちり、皿まで到達したと響くと南野は深く息を吐き、アイスクリームも波立つ。

「父親似だって言ったけど、そういう目をするとな彼女にそっくりだ」

言ってワインを勢いよく煽る。

「君達親子は死に場所を求めて、ここに来たの？」

喉越しが悪いらしく、タイを雑に解く。深く、幾重にも刻まれる首の皺に年齢を感じ、喉仏がスイッチに見えた。

「サワガニさん、ここは海じゃないですよ」

南野は構わず、テーブルへ突っ伏す。グラスへ添える指が、薬指、中指で他は内側へ居られている。そう、まるでピースだ。

僕は南野の頭をそつと撫でてみる。すると手を強く握られた。

会社を辞めてから、いつも誰かの愛人をやってきたけれど、どうやらそろそろ潮時らしい。脳裏にはバイト先が浮かんでしまう。

部屋へ戻る僕を南野は無言で見送った。

ホテル内には南野の趣味か、絵画が沢山飾られている。それぞれ作者は違うようだが、モチーフは女性で統一される。草原を馬に乗って駆け抜ける少女や恋人との待ち合わせに胸を踊らす女性。子を抱き締める母、暖炉の前で編み物をする老婆など、絵画に詳しくない僕でも見ればストーリーが浮かんできた。特にロビーへ飾られた、シャンパンを呑む女性たちは印象に残る。

何故だか無性にあの絵が見たくなって、エレベーターを乗り過ごす。

チェックインの時間を終えたロビーは閑散とし、絵画の風景が何処から切り取ってきたみたいに浮いてしまう。星空の下、三人の女性がグラスを傾ける様は華やかであるのと同時に、彼女達を連想させた。

僕は昔の人が星座を作ったよう、三人の女性を雨宮と成美さん、マキと重ねる。

まず三人の中央で微笑むのは雨宮だ。絵を見た時、最初に認識するのがこの少女だろう。三人の中で一番小柄に描かれているが、長い髪、ドレスやリボンなど彼女を構成するものは他より多く手間を掛けてある。

次に右側の淑女は成美さん。淑女は清楚なドレスを身につけ、ワインを嗜む。見方によっては淑女がグラスに星を浮かべようと誘っており、周囲にそれを夢見がちと笑われている。そして淑女だけが手袋をしていた。手袋の下に隠した指先はひよっ

として荒れているのだろうか。

最後に左の女性。彼女はそばかすを散らした田舎娘っぽい。シャパンパンに酔わされてしまう純粹さを描いているが、女としての未熟さを初々しさに擦り替えているだけと感じ、そこがマキに似ていると思った。少女は何も知らない顔をし、本当はワインの味だって知っているんだ。

そんな三人に降り注ぐ星々、貫こうとする三日月。作者は数ある月の装いの中、三日月を選んだのだろう。三日月は梓に近い部分にあり、朧気だ。注意しないと見落としてしまう。

急にサワガニが音を立て始めた。ハサミを突き上げ、僕に伝える。三日月はお前じゃないか、三日月はお前じゃないかって繰り返す。確かに言われてみれば、そうだった。

何も持っていないはずなのに、いざ支度をすると数日は要った。
菓子折りを片手に乗車した所、いつかの運転手だ。

「あ！ お客さん、どうも」

両肩乗りだし、帽子まで取る。はみ出しすぎの挨拶に乗車を躊躇うが、相変わらずドアを閉めるのは早い。

「……よく覚えてますね？」

「こんな田舎でタクシーに乗る人は少ないですから」

ちつとも笑えない話を避ける為、深く腰掛け体を沈めた。

「今日はお花はいいですか？」

「花もサワガニも要らない」

「サワガニ？」

ミラー越しに小鉢を探られる。

「運転手さん、知ってる？ サワガニって」

「あ！ 海じゃ生きられないんですよね？」

運転手が嬉々と話の主導権を奪っていく。

「実は少し前にサワガニの話をお客さんとしたんですよ！」
思わず、僕は姿勢を起こす。

「客つて、女？」

「ええ、なんでもお兄さんを探しに来られたみたいですよ」

マキだ。

「いやー、とつてもキレイな人だったから女優かと思っちゃいました」

「え？」

瞬間、雨宮の顔が浮かぶ。

「お客さん？ どうされました？」

「い、いや、なんでもない」

再び、座席に沈む。流れる景色に何かを探しそうで、携帯電話を取り出す。バイトの面接をして欲しいと言ったら、クッキーを持ってくれば採用と言われた。

あれから管理人の南野がアパートを出て行けと言ってきた。会合やゴミ捨て当番など、地域交流に意欲的な南野だ。マキによって立てられるアパートの噂は堪えるだろう。

当然、退去勧告はマキにもされ、すぐさま男と出て行ったという。僕に伝言は無いか聞くと、ただ一言。大好き、って泣いたらしいが。

この話を聞いた後で、サワガニの話だ。もしかして僕を追い掛けて来たのかと思った。けれど、マキを女優に間違えるなんて有り得ない。

「着きましたよ！」

なんとか雨宮の可能性を考える前に到着できた。

「帰りも来ましようか？」

「いや、いい」

露骨に寂しそうな顔をされ、運転手に小鉢を差し出す。

「これから住んでいた場所を引き払いに行くんで、預かっててくれませんか？」

「サワガニって何食べるんですか？」

運転手に戸惑う様子などない。むしろ、楽しんでいる。僕は多めの代金と一緒に書籍を渡した。すると金の確認はせず、サワガニの飼育方法を熟読し始めてしまう。

「あの！」

「おつりはいいです、そいつの餌を買って」

「名前は？」

「は？」

「こいつの名前ですよ！」

心付けに気付いたかと思えば、1ページ目の内容が気になった様子だ。そこには第一ステップとし、カニに名前をつけてあげようと記されている。

サワガニの飼育ついて情報を集めようとした際、専用の書籍がなかなか見当たらず苦労した。書店を数件はしごし、取り寄せまでした一冊は児童向けだが、何かを飼った事のない僕には丁度いい。名前を付ける云々より、それ以前の準備が表紙の裏に書いてあるんだ。

今回は自らドアを開け、降りる。

「そのカニ、雨宮って名前」

「雨宮ですか？」

空欄を雨宮という文字で埋めていく。運転手は予想通り、汚い字を書き、線が太いので字に隙間を作れない。運転手の書く雨宮は空っぽじゃないんだ。

「うん」

「分かりました！ きちんとお預かりします」

「ありがとう」

「いえ、お礼はまた乗ってくれた時にでも！ なんせ、田舎じゃタクシーに乗る人が少ないから」

同じ発言なのに、今は笑える。また会う相手ならさよならは言わないで、ピースを向けよう。

運転手も僕にピースをする。

ねえ、サワガニの雨宮。ピースって蓋の無い三角形みたいだね。

男は庭先で車を洗っていた。僕に気付くとホースの先を摘み、側の花壇を潤す。

「 やあ、行くのかい？ 」

「 まあ 」

「 じゃあ、車を貸してあげよう 」

「 いいの？ 」

「 今更？ そのつもりで面接に来たくせに 」

「 まあ 」

泡が流れていき、雨宮と同型の外車が見えてくる。

「 かつこいいいだろ？ 」

「 知り合いも乗ってる、白じゃないけど 」

「 ふーん、それ女？ 」

「 かなりの美少女 」

「 それじゃ、貢いで貰ったんだな。これに美少女を乗せるのは男のロマンだね！ 」

キーを放られた。ライオンがサイダーを飲んでいる。

「ステイックサイダー、観てるの？」

「ん？ まあね。あれは夜眠れない連中が観るアニメだろ？」

干した白衣に袖を通し、ポケットへ手をつ込む。飴やらぬいぐるみ、ハンカチを取り出し、最後にペットボトルを取り出した。

「そんな狭い中によく入るね」

「医者ポケットは希望が一杯なんだよ」

さらに、もう一本取り出す。

「道中で飲むといいよ」

受け取ってみると、サイダーはよく冷えていた。

雨宮と違い、医師の車内は片付いていた。座席の下げ方からは足の長さがきちんと伝わり、スタイルの良さを主張される。

そういえば雨宮はこの仕草を嬉しそうに眺め、いまだ何が嬉しかったか分からない。座席を前に動かす際、つい助手席を伺う。今はサイドアダーが転がっているだけ。

プラネタリウムを観たインターを通り過ぎていく。トラックの間を縫っては急ぐ真似を試みたり。結局休憩を一度も入れないまま、アパートに着く。雨雲を引き連れてきたボディーは、さっそく庭先の南野に迎えられた。

「こんにちは、です」

高級車と僕を見比べ、語尾を丁寧にした南野。会釈した時、視界の隅に僕の荷物が映る。どうやら部屋は清掃されたらしい。

「すみません、次の入居者が決まってしまってます」

「別にいいです」

本心だ。数日滞在したホテルを片付けるにも手間取ったし、むしろ助かったと言える。ドアの横に積まれた段ボールは三つで、一番上の箱から柔軟剤等がはみ出す。キャップをきちんと閉めていない所為でシミとなり、混ざった香りがした。

これ位なら積んで帰れそう。そう思っただけでひとつ担けば、すかさず

南野も階段を上がってくる。

「大丈夫ですよ」

「いえ、この位はさせて下さい」

「迷惑掛けちゃいましたから」

マキが、と言い掛けて止めておく。

「マキちゃんとは？」

「連絡取ってません」

「いいの？」

「はい、今までだつて取つてた訳じゃないんで」

「寂しいね兄妹なのに」

悪気がないのは分かる。けれどこれ以上話しても苛立つ一方だ。最後のひとつを駆け足で取りに行く。と、空いたままの部屋に何か光るものがあり、隙間から覗けば磨かれた床に小さな欠片を見付けた。

「すみません、ちょっといいですか？」

玄関には清掃済みを示す紙が敷かれ、そこには業者名が印刷してある。紙を破かないよう上がり、埃を落とさないよう歩く。袖で指を覆ってリビングに続くドアを閉めた。

目の前に何の遮りも無い空間が広がる。備え付けの家具や家電は定位置に戻され、再び使われる日まで眠りにつく。プラグの穴に吸い込まれそんな錯覚が起き、壁へ額を預ける。

そして小指にそれは触れた。拾い上げる姿が床へ映り込み、僕ごときゅっと抱き締めた。

「どっしたんです？」

南野もやってくる。

「マキの連れはどんな男でした？」

暫し考え、一番特徴的だった男を説明する南野。長身で、白髪交じりの五十代。きつと若い頃はもてたろうにと推測し、すれ違った際は油の臭いがしたと言う。たぶん、それは父だ。握り締めた星の欠片は作り物。何度も折られてたに違いない。

「何もありませんね」

自分がしておいてよく言う。法律を持ち出す気など更々ないものの、他の人なら問題にされる。それに何も無いと言われれば、部屋には未練すら無いのだから言う通りじゃないか。気付くと南野はベランダで煙草をくわえていた。

「吸うんですね」

「まあ、最近は肩身が狭いですけど」

一本差し出してくる。

「メンソールなんだ」

「何処となく、健康な気がしない？」

首を振る。

「煙草は百害あって一利なしらしいから」
「ははは」

取って付けた笑い方。隣に並び、屋根を仰ぐ。庭と違い、流石に手入れは行き届いていない。退色した青は雨空と同化した。南野も見上げると、昼の月を指さす。うつすらした輪郭を煙草の先でなぞる。僕はそれが特に意味のない仕草であると昔から知っている気がする。現に南野は何かを言うでなく、煙を吐き出すだけ。

「あの、いいですか？」
「ん？」
「これを投げてもいいですか？」

星の欠片を見せる。最初は欠片の正体が分からなかったみたいだが、穴の空いた部分を確認すると頷いてくれる。雨宮や僕の田舎だけでなく、おまじないは一般的ななのかもしれない。

欠片を握り締め、手を振り上げる。遠くへ、出来るだけ遠くへ投げてみた。欠片は弧を描き、少しすると乾いた音をさせる。軌道の全てを追えた訳ではないが、記憶で補完は可能だ。

欠片を失った手が左手を求め、編んだ指先へ南野が問いかける。

「願いも重力には適わない、か」
「と言うより、願いを込めるの忘れてました」

南野は僕の横顔を見つめ、僕は空っぽの部屋で屈むマキの姿を想

像し、そのマキが南野を睨む。

前は始まりも終わりも訪れないでと祈ったが、今は少し違う。

爪先で潰した煙草を律儀に始末し、南野は部屋を出て行った。守りたいコミュニケーション内では喫煙出来ないのだろう。ぎりぎりまで吸い切った後は飴を口にしていた。喫煙後すぐに飴やガムを口にするのは臭いを誤魔化す為だ。南野はミントの香りで切り替えを行っている。そして、あちら南野だって喉仏をスイッチにして生きているんだ。

僕は携帯電話の電源を入れた。

リニユールを控えたショッピングセンターなど探せばすぐ見つかった。一応、店を訪ねるとメールはしたものの勤務中だろう。突然の対面は決して喜ばれないと分かっていたいながら、店内に踏み込む。

ファミリー向けの店が多く並ぶ中、成美さんの働くバッグ屋は確かに高級感があり、メールや話で伝えられた通りの内装も効果的だ。オレンジがかつたスポットライトは、革の持つ温かみをより演出し、思わず手に取りたくなる。さっそく一人が近付いてきた。

「宜しかったら、お手にとってご覧ください」

あえて転がしてあるリュック。それをキレイに切り揃えた指が起こす。目覚めたリュックは高価な金額が見えるようになり、それとなく反応を伺う店員。柔らかな口元は商品を手にとった瞬間、滑らかな説明が始まるんだろう。

鏡を促され、とりあえず背負ってはみる。オイルをたっぷり染み込ませたと言う牛革から柑橘系の香りがした。

「このリュックは表面にもオイルを手で塗り込んでいますよ、オレンジの香りがしませんか？」

す、と脇のベルトを調整する店員。中身をキレイに詰めてあるリュックは購買欲を刺激する。店員は僕の小さな芽生えを敏感にキャ

ツチし、一旦離れていった。付かず離れずの位置から構える。今はこうした見栄えがしても、実際の使用時はこんな風に形を保つてはられない。バッグは詰め物の仕方が変わる、成美さんの言う意味が分かった。と、同時に成美さんがこの店と似ているのも。

店内を一周見回す。店員は先程の女性を含め、三人居る。店の広さや今日が平日であるのを考えれば人員は揃っており、問題などなさそうだ。けれど、この中に噂の後輩が居るなら、素直な足し算にはならないのか。

レジの隣で書き物をする女性、商品手入れをする女性、そして僕の動向を優しくチェックしている女性。目が合えばそれぞれ微笑みを向け、むしろ接客に慣れた様子だ。

「あの」

「はい」

「成美さんは居ますか？」

商品以外の質問をしても、表情は変わらない。

「成海の事でしょうか？ 成海でしたら退職しました」

静かに流すジャズは会話を筒抜けにする。バッグを磨いていた一人がこちらを見た。

「成海に何か？」

「いえ、ここで働いているって聞いたから。いつ辞めたんですか？」

「今年の春です」

ところで如何ですか、とリュックに話を戻す女性。取り寄せれば色違いがある旨を早口で告げ、他の選択肢も持ってくる。その選択肢は商品整理をする女性の足元にあり、二人は意味深いアイコンタクトを交わした。

僕はリュックを探しに来たんじゃない。とは言え、周りをリュックに囲まれている。察するに店を出ていくよう仕向けられているんだ。この店は目的が無ければ入ってはいけない店なんだろう。もちろん、目的と言っても商品に対してだ。

たぶん、独特な雰囲気はこうした部分から漂っている。ふらりと立ち寄って買える物が無い。財布を買いに来た、リュックを探しに来たなど、そういう意思を持った人間が迎え入れられるみたいだな。つまり、ここに並ぶ商品は誰かの必需品である、という品揃えの基本が異常な濃さで現れている。目に映らない、肌で感じるこの濃さに成美さんは理想を投影したんだろう。

オレンジの光は空気中の汚れで筋を作る。捉え方によっては、それは檻の柵。一体、ケースに飾られているのはどちらか疑いたくもなる。

リュックを手放すと女性がさつと片付けを始めた。商品はあるべき場所に返されるのだが、その際僕は気付いてしまう。女性が無意識のうち、天井から注ぐ貫きを避けているのに。

僕はこの店からひとつでも良いから逃がしてやりたくなる。所持金と相談し店で一番安いカラビナを買うと、女性は申し訳なさそうな顔で礼を言った。

礼には振り返らなかったが、木の床を鳴らし、店員同士が集まり話し合うのは見えた。

駐車場に戻ると成美さんから数件の着信とメールが届いている。家賃を催促しての連絡だと思ったらしく、すぐ振り込むと言ってきた。しかし僕に反応が無かった為、観念したようだ。最後のメールにはプラネタリウムに居ると書いてある。今から向かうと簡潔に返信し、ラジオを付けた。

僕がラジオを聞こうとする時は悲しいニュースか、どうでもいい情報しか流れない。それでも耳は言葉を拾い、理解を促す。聞いた事ない街では食育が盛んらしい。粉食、孤食と書いて、こしよくと呼ぶスタイルを見直そうと話す。みんなでよく噛んで食事をしようと呼び掛けられ、コンビニへ立ち寄る事にする。サイダーとおにぎりを二人分購入した。

最寄りのパーキングからプラネタリウムまで15分は歩く。噴水に腰掛けた成美さんは汗ばむ僕を、もう見えない振りしない。認識するなり立ち上がり、遠慮がちな笑みを浮かべた。

「ごめん、待ったよね？」

「うん。始めて待たされた」

泡だらけのサイダーを嬉しそうに受け取る。その指先は爛れ、痛々しい。

「洗剤で荒れちゃって」

折り曲げる際、ひび割れる音がした。けれど成美さんの表情は穏やかなままで、先に見ていられなくなったのは僕だ。干からびた噴水へ話題を変える。

「懐かしいね、ここ」

「でも最近、妹と来たんでしょ？」

「まあね」

縁にはハンカチが敷いてあり、そこを避けて腰掛ける。

「おにぎりも買ってきたんだ」

「ここで食べるつもり？」

「プラネタリウム観ながらでもいいけど」

キャップを開けるのを躊躇いながら、提案にも戸惑う成美さん。

「今日はジーンズなんだね」

今日のスタイルはシンプルと言うより、地味な印象を受ける。

「スニーカー履いてるのも初めて見た」

「あなた、職場に行ったんでしょ？」

小さく頷く。

「だったら、今更じゃない」

成美さんは勢いよく隣に座り、ハンカチを吹き飛ばす。

「やっと肩の荷が下りた気もする」

舞わされないよう、光沢感のある生地が踏み締められる。汚れた爪先に怒りは帯びず、いつもより色味の無い唇が、柔らかかとは似付かない緩さで開いていた。僕が望むなら、そこから真実を取り出すのは簡単だろう。

「聞かないの？」

「何をですか？」

「本当の私の事」

髪を透こうとし、絡まり、引き千切る。そして成美さんは僕を見つめた。

話してしまった方が楽な癖に、聞かれなきや答えない姿勢をする。こういう場合、素敵な男性なら吐き出させてやるんだろう。全てを受け止めてやれる。

「いえ、別に知りたくないんで」

僕はそう、首を傾げた風に返した。

沈黙が続いている。僕らの神経は肩が触れない距離感を保つ事へ注がれ、緊張していた。誰かに背中を押されようものなら、胸の内を散らかしてしまおうで。

踏まれたままのハンカチには足跡が付く。沈黙が終わらない限り、拾われないだろう。それにサイダーも飲めない。固定された視野にトラックは行き交い、煙を引いていく。

このまま沈黙が続けば、成美さんと一緒に居られるんだろうか。ふと、そんな事を思い付く。思い付いて、やっぱり無理だと想像したがない。

例え成美さんがこの先の援助を申し出てくれたとしても、隣に並ぶ自分をイメージ出来ないのに気付く。今、こうして座っているのに、だ。

「ねえ、何かあった？」

そんな風に訊ねられた気がし、成美さんを伺う。すると成美さんもこちらに聞かれた顔をする。何かあったって言われ、何かあったと返せるなら、僕らはそもそも関係を持たなかったはずだ。

風が凪ぐと肩へ重みを感じた。いつもしているリングを失い、バ

ランスが取り辛い成美さん。カラビナを薬指に与えてみたら、サイズなどあったものじゃないと一蹴された。

「何、これ」

「店で買えるの、これしかなくて」

「そっか」

腰に手を回される。肩が触れ、再び流れ始めた時間に流されないように。

「成美さん、プラネタリウム観てきませんか？」

「……流れ星、見つかるかな？」

「見つかるといいですね」

うな垂れたのを肯定と決めつけ、成美さんを引き上げる。ふらついて胸に戻ろうとしても、受け入れなかった。するとカラビナを身に付けた左手が拳を作る。

「もう、駄目なのね」

「駄目も何も始まってないから」

成美さんは一瞬、傷付いた顔をした。

「随分、酷い事を言うのね」

「酷いのは成美さんじゃないですか？」

言われると、傷ついた顔が慌てて笑顔に塗りつぶされ、それがまた傷ついた顔に見える。

「とりあえず、中入ろうか」

入り口へ向かっていく。ずんずん一人で進み、自分の中で振り返るタイミングを探しているみたい。振り返ったら何と云うのだろうか、どんな言葉で僕を傷つけるんだろう。

スタイルは地味でも、やっぱり歩き方はキレイだ。なかなか振り返らない背中に声を掛けてみる。

「お嬢さん、ハンカチを落とされましたよ？」

立ち止まる成美さん。入り口前で自動ドアが反応した。

「ハンカチ、落としたよ」

繰り返す。受付の女性が成美さんを戸惑いつつ迎えているのが分かる。もしかして泣いているのかもしれない。僕は足音をさせ、後を追いかけた。

成美さんは結局、振り返らなかったし、泣いてもなかったんだけれど。

開演まで数分に迫った所で、学生が二人やってきた。離れて座る僕らを二組とカウントし、来場数の少なさに吹き出している。

先に席に座ったのは僕だった。成美さんも一旦は隣に座ろうと手を掛けたが、目が合ったら弾かれたみたいに距離を取った。

取られた距離は遠い。他人の距離だ。ここからの成美さんは思い

詰めた横顔でカラビナを眺め、握っては緩めている。
きつと僕の視線には気付いているだろう。だから、あえて僕より前に陣取ったんだ。

照明がゆっくり落とされ、星たちが示しを合わせて輝き始める。
何度観てもこの瞬間はいい。浅く座り直し、空を仰ぐ僕。

成美さんが言うには、このプラネタリウムでは上映内容と関係なく、星を流すらしい。いっどこで流すかは非公開で、実際に流しているかもよく分からないそうだ。

秋の星座の説明など目もくれず、成美さんは流れ星を探している。忙しなく頭が揺れ、時折息を吹き掛けた。生暖かい溜息が夜空を曇らせてしまわぬよう、僕は見張る事にする。

と、見張ること数分。突然、成美さんが立ち上がった。勢いある起立に僕も釣られてしまう。ゆっくり振り返る成美さんはそんな僕を冷めた目で見てくる。

「おにぎり、頂戴」

「え？」

「なんかイライラしてきた」

大股でやってきて、袋の中のおにぎりを掴み出す。そのまま隣に腰掛けると、あつという間にかぶりつく。一口また一口と食べ進める度、口は大きく広がる。

「成美、さん」

頬の膨らみをサイダーで流す成美さん。その目は潤み、それから流れた。

「う、っ、う」

食べて、飲んで、泣く成美さん。

「泣くか食べるかにして下さい。なんて言っていないか分かりません」
「別に慰めて欲しいなんて思っていないから」

サイダーで喉を湿らせてから、はっきり告げられた。

「ふーん、そうですね。じゃあ、こんな時はどうしてればいいですか？」

「見ない振りしてよ」

即答される。そして、ふたつ目に手を掛けられた。フィルムを破らせまいと抵抗したものの、指ごと食われそうになって退くしかなかった。

不思議な事で人が食べていると美味しそうに見えるもの。僕は喉越しだけでも共にあるうと飲み込む真似をした。すると、どさくさに紛れ、何か大きな塊が体の奥へ落ちていく。

「あ、流れ星」

「着席しようとした僕は指摘に貫かれる。」

「え？」

「ほら！ あそこ！」

肩が強く叩かれ、上下に揺らされた。示される方角を追おうと振り返るが、視線は上手に滑らない。それ所か、涙から一変、嬉々とした成美さんの雰囲気霞む。

「ねえ、見えた？」

僕の顔を覗き込み、は、と息を飲んだ成美さん。成美さんもどさくさに紛れ、何かを胸の奥へ沈める。僕は声にしないその気持ちを察し、見ない振りの後の聞こえない振りすればいい。

成美さんが背を向け、残りを食べ出すから、僕も力を抜いて腰掛けた。こうすると体半分は触れ合える。けれどそれは同時に、ひとつにはなれないって証明にもなるんだろう。触れ合った部分は温かい壁。越えられない、越えちゃいけない、何より越えた所で先が無い。

「あーあ願い事するの、忘れちゃった」

そして成美さんは棒読みした。

23

23

帰り際、受付の女性に声を掛けられる。

「あの、マキさんの」

「ああ……」

僕の気の無い返事に周囲を見回す女性。長くなりそうな気配が漂い、成美さんが手前のソファへ向かう。スプリングを確かめてから腰掛けるも、合皮の質感に耐えられず、すぐ立ち上がった。

「マキさんと連絡が取れなくて。このままだと……」

「クビでいいです」

「え？」

「マキは実家に帰りましたから」

たぶん、と付け加えようか迷ってやめておく。

「あ、あの」

「実家に黙って出てきたんだと思います」

女性は中腰でカウンターへ乗り出していたが、話をしているうちに力が抜けていった。パイプ椅子からもベタつく音がする。

「事件に巻き込まれたとか、そういうのじゃないですから」

今度こそ、たぶん、と続けた。

「そうなんですネ」

女性は文字通り、胸を撫で下ろしている。

「突然来なくなったから、やっぱり聞かれなくなかったのかなって」

「聞かれたくない？」

「あ、はい。同僚がお兄さんと似てないねって言ったらしいんですよ。そうしたら、その」

その言い淀みは僕を苛立たせる。それでも怒気を振り払おうと、かぶりを振った。

「腹違いなんです。それに僕らは小さい頃から似てない、似てないって言われてましたよ？ 今更気に病む事じゃないはずですけど…」

…

僕を遮って会話を続けさせる為、わざと語尾を伸ばす。

「その質問には本人も笑っていたそうです。でも、気を遣った同僚がお兄さんと似ている部分を探そうとしたら、態度が急変したみたいで」

女性が目配せする方向には包帯を巻いた男性が居た。

「マキがやっただんですか？」

「え、ええ。まあ」

「大丈夫なんですか？」

「勤務に支障は無いようですが、その、なんて言うか。心の傷が」

ふいに男がこちらを向く。そして向くなり、こちらへ駆けて来る。手にした書類をカウンターへ積み、僕と女性の間には壁を作った。

「マキさんのお兄さんですか？」

男はいかにもな風貌。実直で面白味に欠け、おかしな正義感を持ち合わせているのが会話をしなくとも伝わってくる。大抵この類はマキが可哀想だ、守らなきゃいけないって勘違いを起こす。

ちなみに兩宮もその気があるが、絶対的に違うのは兩宮には性が伴う事だ。マキの場合、例え僕から救い出したとしてもハッピーエンドは訪れない。白馬の王子様は己の正義を慰めたなら、颯爽と去っていく。

返事をしない僕に男は丈の足りないネクタイを見せてくる。これ以上、距離をつめられるのは不快で成美さんの方へ足を向けた。窓から噴水を眺めていた成美さんは話が終わっていない雰囲気を感じ、苦笑を浮かべる。

「いいの？」

「話しても無駄だし」

「そうじゃなくて、さ」

再び、僕に背を向け噴水を眺め出す。

「私をここに置いていなくていいの？」

よく磨かれた鏡は成美さんの表情を隠してしまう。細い肩が力んでいる。

「じゃあ、ここに」

「うん」

ところで二度と会う事の無い人とはどう別れたらいいんだろう。

癖で上げてしまった腕が仕草を迷って、指先に館内の視線が集まる。この冷たい熱を断ち切る為、僕はピースを掲げてみた。

けれどすぐに恥ずかしくなり、前髪をいじる。一瞬、ほんの一瞬のサワガニピースじゃ、成美さんを完全に切り離せやしない。

成美さんは僕と過ごした日々を小さく畳んでは広げ、広げては畳むと思う。そしてその繰り返しは思い出を擦り切れさせ、千切れそうな部分には都合の良い記憶があてがわれるんだ。

結果、成美さんは偽ったんじゃない、本当を束ねただけになる。

バッグ屋に勤めていた事、出来の悪い後輩のフォローをさせられた事、みんなみんな真実なのだから。

逆にひとつでも創作を混ぜていれば罪悪感くらい残ったのに。汚いもの、不純物が底へ溜まるよう、成海を成美と聞き間違えた事だけが遺ってしまった。皮肉にも美しいという字が沈み、文字の持つ輝きは錆び付く。

錆はもやを生み、薄い膜となるんだろう。

「あの！」

懲りない男が僕を呼び止める。

「マキさんはお兄さんの事が好きだって言っていました」
構わず出口へ向かう。

「血の繋がっていない部分が安心出来るって！」

自動ドアが開き、男の声に押し出される形となった。男や成美さんは追い掛けてきそうもない。つまり、振り返る口実が無い。そしてこのまま立ち止まって、ドアがもう一度開いたら動揺が筒抜けになりそう。

だから、僕は走る事にした。

久しぶりに走った。とにかく駐車場へ向かって走る。最初は自分の重みが他人事だったが、息が上がるにつれ実感出来た。それにしてもこんなにも走れないとは思いもしなかった。周囲の音が消え、追い抜かされる車のナンバーが偶然にも減っていく数字で、カウントダウンをされているみたい。あの角を曲がったら足を止めよう、止めようと考えながら走り続けてしまう。足を止めてしまえば、揺れ動く気持ち定まる。

そのままの勢いで運転席に滑り込んだ。ハンドルを握り締め、小刻みに震える膝に耐える。瞼の裏に男の言葉が張り付き剥がれない。強く瞑って、擦っても益々粘着される。

僕は膝を抱え、血液の流れる音を探してみた。それから少し、ほんの少しだけ泣く。すると涙と一緒に瞼の裏のものが落ちていった。

マキが妹という関係を永遠にしたがったのは、兄である僕より他人の僕を求めたからなのか。

ふいに、サワガニピース、不細工にピースしたマキが浮かぶ。あの男の許でしか生きられないマキは対岸から、僕らを隔てて流れる血を困った顔して眺める。

今なら、今更だが、妹を助けてやりたいと思う。

車を返しにきた僕を、医師はローズテイーを嚙りながら迎える。

「やあ、おかえり」

ゆっくり腰を上げると、白衣がよく映えた。相変わらず優雅な庭に目を細めたつもりが、男の笑顔を誘ってしまったらしい。両手を広げられ、抱き締められそうになる。

「そういう趣味は無いんで」

「いやー、男になって帰ってきたから褒めてあげようかと」

うんうん、と頷く医師。

「顔付き、変わったよ？ 前もイケメンだったけど、今はもっといい」

僕を通り過ぎ、愛車を覗く男。飄々とした横顔が後部座席の荷物を見付け、窓をこつく。

「君、洗濯得意なの？ 助かるなー、家事はてんで駄目なんだよ」「バイトって家事をやるって事？」

「うーん、それもいいけど」

男は射抜くように人差し指をこちらへ立てる。

「またすぐ出掛けるんでしょう？」

「そうだ朝刊、なんて呟きつつポストへ向かう。さっそく広げるとテーブルに戻っていく。」

「出掛ける前に朝食食べていくといいよ」

長い足で向かいの椅子を促される。すると先客であった葉が滑り落ちていった。

「あんたって何者？」

「ん？」

紙面から顔を覗かせる。

「見て分かんないかな？ イケメン医師なんだけど」

呆れるより先に玄関のドアが開く。

「まあまあ、お帰りなさい！」

焼きたてのパンの香りをさせ、女性がやってきた。医師に用意したはずのメニューを僕の前へ置く。

「先生は後でいいです」

医師の不満を遮り、微笑む。

「あなたたちつて、何者？」

別にまともな答えは期待していない。と、女性が手を叩く。

「そう言えば！ 自己紹介が未だでした！」

かじったパンから甘いジャムが出てくる。医師は甘党なんだろうが。一口しただけで塗り過ぎなジャムがはみ出す。

「ああー、確かに！」

医師が伸びをしながら笑った。

「ね、ね、そうでしょう？ ちょっと待ってて下さい！ 椅子と先生の朝食を持ってきますから」

慌ただしく室内に向かう背中を医師は頼杖して見送る。肘の下に敷いた新聞には、どんな記事が綴られているんだろう。

シャツに付いたジャムを拭う振りして伺っていると、医師が読み上げを始めた。

医師は大声で出来事を伝える。カニ座のラッキーアイテムがギンガムチエックのテーブルクロスで、明日から他県に雨が降るとか。何処かの国じゃ双子のパンダが不仲、水族館ではペンギンのショーが開催予定だの。

ほんとうでもいい記事ばかり、けれど悲しい事は聞こえない。

僕はテラスを見上げる。と、女性が母を連れ出してきた。いつか医師がした風に母の手で振ってくる。太陽に透かされる細い腕だつて、童謡で歌われるよう赤い血が流れ、生きている。

「自己紹介はまた後でいい？ 名字が変わるかもしれないし」

「へー、でも出来るだけ早く教えてね。ネームプレート作らなきゃいけないしさ」

医師は白衣からプレートを出す。真っ白な空間は僕の名を刻まれるのを待っているらしい。

僕は皿を空にしてから席を立つ。

「いつてらっしやい」

空から届いた挨拶は母の声に似ていた。

診療所から少し歩いた所でタクシーを拾う、というより勝手に停まった。

「駅まで」

乗車するなり告げる。

「あ！ 雨宮、元気ですよ！」

運転手は行き先を了解する前に、僕へピースする。

「仕事しろよ、仕事」

膝で運転席を刺激したら、罰が悪そうに帽子を搔く。

「いやー、後ろ姿見たら嬉しくなっちゃって」

「そんなに客が居ないのかよ」

「まあ、ぼちぼちヤバイ感じですかね」

全く危機感を感じさせないトーンでアクセルを踏む。

「駅ですよ？ 道の駅には寄りますか？」

「なんでそんなに道の駅に寄らせたいんだよ？ 回し者か？」

「あはは！ そう言わないでくださいよ。地域活性の為なんですから！ それにめちやくちゃ可愛いバイトさんが入ったんですよ！」

車体は対向車が居ないのをいい事に、道の真ん中でUターンする。駅とは逆方向の道の駅に向かう。

「めちやくちゃって……」

溜息で窓ガラスが曇る。それを拭おうとした際、自分の口元が緩んでいるのに気付いた。期待してしまう自分も、思いの外悪くない。

「実はその人に雨宮を預けちゃったんですよ」

運転手にはやはり悪びれた様子は無い。

「で、元気なんだよね？ 雨宮は」

「はい、とても元気ですよ。出掛ける前に顔を見て行ってやって下さい。あ、ついでにお土産なんかも買ってくれと嬉しいですよ！」

「商売人なんだな」

言つと、ぶんぶん頭を振られる。

「おい！ 危ないだろ、前みて走れ」

「あ、すみません」

タクシーはホテルに続く一本道に入り、ゴルフ場を通り過ぎる。

「そう言えば、新人のバイトさん。ゴルフ帰りの人たちに声を掛けられるみたいですよー、いかにもお金持ってますみたいなおジサマ達とか！」

「へー」

「でも、全く靡かないらしいです」

「なんで？」

何故か運転手が得意気に語っている。

「理由は知りません！」

きっぱり言い放たれた。僕は思わず吹き出してしまい、笑っているうちに道の駅へ到着した。以前より若干賑わっているのは、その新人のお陰だろうか。

運転手が僕より先に店内へ入っていく。一方僕はここからのホテルを確認する。南野は今日も支配人として、あのホテルを切り盛りしているんだろう。

「どうしたんですか？」

なかなか入店して来ない僕を呼びに来る。すでに手にはサイダーが握られていた。

「三本も飲むの？」

「違いますよー、一本は自分に」

ぶんぶんと頭を振る。

「で、一本はお客さんに」

有無を言わず握らされた。

「それで最後の一本は彼女に！」

店の入り口に振り返る運転手につられると、ちょうどタイミングよく暖簾から白い手が覗く。

その人はすぐ此方に気が付き、微笑んだ。

「その沢へ誘っておきましたから！」

つつん、と肘で腹をつつかれる。そして満足な顔をし、運転席へ帰って行った。

雨宮はギンガムチエックのエプロンを付け、僕のリアクションを待っているようだ。ひらひら裾をちらつかせている。僕は医師がそうした様に両手を広げる事にした。

「……」

黙る、雨宮。

「じめん」

謝る、僕。

「うん、ちょっと違うかなって」

「だよな」

「うん」

雨宮は手を後ろに組み、前のめりになって近寄って来た。あの日、急に居なくなつたままの雨宮だ。特別変わった様子は無い。いや、エプロンはしていなかったか。

前髪をいじろうとした手を、さっと掴まえられる。

「あー！ めんどくさいんだ？」

「うん、ちょっと」

僕を掴む腕には包帯が巻かれていた。

「今から休憩なの、沢に降りない？」

僕の視線を沢と無傷な腕へ誘導する雨宮。無傷な腕には虫かごが握られている。

「この子の水も取り替えたいし」
「分かった」

再会は別れた日の続きとはいかない様だ。たとえどしく降りる僕と違い、雨宮はしっかりした足取りで水辺を目指す。僕との距離が開くと立ち止まり、穏やかな笑みを向けられる。雨宮は僕を置いて行かない為に立ち止まっているはずなのに、そうされる度、縮められない距離を覚えた。

雨宮は沢に着くなり、裸足になって浅瀬を歩き始める。僕は放られたカゴと靴らを横目に座り込む。

25

「気持ちいいよ？ 入らないの？」

「いい、これから実家に帰るんだ」

「あー、トキちゃんの所？」

雨宮は屈み、石を取り出す。

「エプロン、濡れてるぞ」

「ねえー、トキちゃんの所に行くの？」

「そうだ」

「ふーん」

気に入らなかったのか、石を投げ捨てる。

「ま、別にいいけど」

「雨宮も一緒に来るか？」

水中の石を拾っては投げていた雨宮だが、誘いを聞くなり勢よく立ち上がった。エプロンの裾からは水が音を立てて流れていく。

「行く訳ないじゃん！」

「ま、そうだろうね」

「君、本気？ それ分かって言ってるの？」

地団駄を踏み出す。自ら生んだ水しぶきに打たれ、痛んだ顔をす
る。

「う、ごめん、雨宮」

こちらに水を飛ばされたくなくて、身を擦った。しかし、この仕
草がより雨宮を刺激してしまう。雨宮はジャンプをし、全体重を水
面へ押し込む。僕を非難しながらジャンプを繰り返す。

一際大きく波立っただのは雨宮がバランスを崩した時だ。全身で水
面を叩く。悲鳴を上げる間もなく倒れていった雨宮に慌てて駆け寄
るも、雨宮は水中からそれを拒む。

半分が泡となった雨宮の発言だが、何を言わんとしたかははずぶ濡
れな表情を見れば分かる。流石の僕でも足に縋られたら分かる。

「雨宮？」

「いや、いや、行かないで！」

しがみつく雨宮。

「トキちゃんの所になんか行かないで！」

雨宮は僕を這い上がって、背中に手を回してくる。透けた包帯か
ら真新しい傷跡が見えた。とても深く、痛々しいものだ。

「お願い、お願い……お願いだから」

僕の胸を叩きながら呟き続ける雨宮。暫くすると、叩く間隔が段々とあき、力も弱まってくる。

「雨宮？」

肩を持って、覗き込んでみた。

「雨宮？」

「……あ、ごめん。大丈夫」

握り締めていた指先が解かれ、だらりと落ちた。

「よく分かんないんだ」

「分からない？」

「もう、よく分からないんだ。どうしようね？ どうしたらいいんだろうね？」

雨宮は閉ざすよう、そこで体育座りをしだす。

「君と別れた振りして、本当は後を追って来たの」

可能な限り、小さく小さく体を折り畳む。立ち尽くした僕にその包みを広げる勇氣は無い。ただ、見下ろすだけ。

「行って、もう行って」

「雨宮」

「もう！ 行ってってば！」

空を斬る雨宮の指先。雨宮ははっとして顔を上げ、触れようとせず突っ立っている僕の有様に見開いた。

「あ、ははは。そっか」

頬を膝の上へ置き、僕から目を反らす。

「ごめん、雨宮」

「やだなあ、やめてよ。振られたみたいになるじゃん」

「ごめん、雨宮！」

「いって、謝らないでよ」

「マキの事が済んだら帰ってくるから！」

「そんなの嘘」

再び顔が見えなくなる体育座りをされる前に、僕は膝をつく。

「ごめん、わたし君の事、待てないよ」

唇を噛み、血を滲ませる。

「ここで置いて行かれたら、もう待てないよ」

「じゃあ、一緒に行こう」

「それも、嫌」

雨宮は僕を押し立て上がった。

「また妹を選ばれるなんて、死んでも嫌」

ふらつきながらも岸に上がり、おもむろにサイダーを手取る。
固まった指先でやっと蓋を開け、傷のある手で虫かごを持つ。

「雨宮？ 何をするんだ？」

「この中にサイダーを入れるの」

カゴの中は日頃の手入れを感じさせる。あの雨宮にサワガニは大事にされたのだ。ものぐさで、何かと凍らせてしまおう雨宮に。

「サイダー入れたら死んじゃうよね？ でも大丈夫だよ。今度こそ、わたしも一緒だから」

言って、サワガニと見つめ合う。サワガニは理解したのか両方のハサミを掲げる。どう足掻いてもサワガニは雨宮には適わない、降参するしかない。

雨宮はそんな降伏にまた唇を噛む。僕が隣に並ぶとカゴを抱き、僕はカゴごと雨宮を抱いた。

雨宮は抵抗しなかった。

「駄目、そんなことしても待ってられないもん」

「僕、雨宮の事が好きだ。たぶん」

「……たぶん、って」

「ごめん、今はそれしか分からない」

成美さんと離れ、これからマキとの決着がつけられたら、僕の三角形は崩れる。で、僕は残った線上で雨宮と向き合いたい。もちろん、この線が赤い糸とは限らない。僕らを繋ぐものなど、それこそサワガニのハサミで切れてしまうのだから。

「わたしね、バイトしても失敗ばかりなの。冷蔵と冷凍がよく分からないみたい」

力を抜き、僕に寄りかかる雨宮。

「相変わらず、何でも凍らせるんだな」

「前にさ、君が凍らせる理由が見つかるといいねって言ったの。覚えてる？」

答えないのが返事であり、温かい溜息を付かれる。髪を撫でてやりたいが、先ずは絞る。あつという間に足元へ水溜まりが出来た。

「で、理由は見つかったの？」

雨宮はゆっくり頭を横に振る。

「だから、ちよつとだけ探してみようと思うの。せつかくバイトする気にもなつたんだし」

「雨宮……」

「ちよつと、だけ。ほんの、ちよつとただだから。すぐに待てなくなるよ」

そう告げると雨宮は目を閉じた。目尻に溜まっていた涙が流れていく。

「君に話したいことが沢山あるの」

「うん」

「聞いて欲しい事も沢山あるの」

「うん」

「たぶん、って言うてもいいから、もう一回好きって言うて」

虫カゴを取り上げ、僕は雨宮を強く抱き締めた。

「雨宮、たぶん好き」

こんな曖昧でも雨宮が満たされていくのが感じられる。初めて見る雨宮の満面の笑みは欠けていく脆さを伴いながら、輝くものだった。

あれから3年の月日が過ぎた。僕は母の居る療養所で忙しく働いている。最近では南野が見舞いに訪れるようになり、今朝も出勤前に花を置いていった。

「南野君、ちょっと」

花をいけている途中で院長に呼ばれる。彼は相変わらず飄々としており、院長の責務から潜り抜けてしまう時がある。今も庭先でお茶をする女性をカーテン越しに伺う。

「誰、誰？ あの美女？」

隣に並んで見れば、雨宮が母の話し相手をしている。近い内に紹介すると話してあったが、いきなりの訪問に周囲は騒がしい。

「雨宮！」

窓から声を掛ける。

「ああ」

すぐに反応し、席を立つ。ギンガムチェックのエプロンは庭の緑

と相性が良い。違和感のない姿に目を細めていると、院長に溜息をつかれてしまう。

「あれ、例の彼女？」

幾ら月日が流れようと、全てが丸く収まる訳じゃ無い。僕らには僕らなりの傷が残ってはいる。ただ、それを舐め合ったり、ひげらかしたりする程、今の生活に不満がある訳でもない。

「ちよつと休憩頂きます」

返事を待たず庭へ向かった。途中、廊下で院長の奥さんとすれ違い、自慢のローズテイーを渡される。相変わらず余計な詮索をしない人で、黙って僕を見送ってくれた。少女趣味なカップを手に出場する僕を、母と雨宮が無言で迎えるのが目に見える。ドアを開くと、さっそく雨宮が沈黙した。

「今日、バイトは？」

「暇だから帰された」

僕は母の帽子を直しながら腰掛ける。

「突然来てごめん」

「別に。母さん、今日は具合がいいみたいなんだ」

と、カップを倒しそうになる雨宮。どうやら僕の母と分からずに接していたらしい。それに具合の善し悪しの判断が出来ない様だ。僕だって最近やっと分ってきたつもりで、母は大抵の人には植物状態に映る。

「じめん」

母の汗を拭っていると、雨宮が謝ってきた。

「さつきから謝ってばっかだな。別に気にしてない」
「うん」

雨宮は短く髪を切っている。前のように透く楽しみは無くなったものの、表情が読み取り易くなった。今も頬を撫でたら穏やかな顔を浮かべ、微笑む。

「お母さんの結婚式に、わたしも出席してもいいか聞きたかったの」
「そっか」

実は先月、母は再婚した。南野の強い希望があったのだ。僕らが越してきた頃から再婚の申し出を受けていたものの、なかなか認められなかった。父や義母、マキと縁を切ってしまった僕には、家族と呼べる人が母しか居なかったからかもしれない。血に拘っていたのは義母やマキだけじゃない、結局僕もだ。

「南野くん」

雨宮も僕をそう呼ぶ。

「聞いてみてもいい？」
「聞いても答えないと思うけど」
「うん」

ぎこちなく頷き、雨宮は母の手を握った。雨宮の指も華奢だが母

のは一段と細い。手を取った事で雨宮にはそれが充分伝わったようで、緊張から背筋が伸びていく。

「あ、あの、南野くんのお母さん！ わたしも結婚式に出席してもいいですか？」

母に会ったらそう言おうと決めていたのだろう。台詞みたい。雨宮の頬は染まり、一気に告げた為に息が上がっている。

予想通り、待てども返事は返って来ない。僕は雨宮の肩を寄せた。

「ごめん、返事なくて」

「ううん」

雨宮はあれから泣き虫になってしまった。最初のサワガニ雨宮が死んだ時は手がつけれない位、泣き続けた。その後、二代目を探しにいったのだが、サワガニを見つける度に喪失感を煽り、泣いては我慢し、また泣くを繰り返す。

「雨宮も出てよ、結婚式」

「いいの？」

頷くと、雨宮は涙を引っ込める。

「ありがとう」

「参列者が院長夫妻だけじゃ、流石に義父さんが可哀想だ」

「ホテルの関係者は？」

「誰も。手放しに喜んで貰えるものじゃないし」

南野が数年先の定年を待たず退職したのは、退職金を母の治療費に当てる為だけじゃない。小さな街だ。雨宮も噂くらい耳にしているだろう。

南野が起こした交通事故が母をこんな境遇にした事。さらに二人は不倫関係に行き詰まり、心中を謀ったのではないかという憶測を。

「っ、ごめん……」

雨宮はまた涙をこぼす。

「大丈夫、母さんたちは幸せになれるよ」

胸に埋もれる雨宮を慰めた。雨宮はシャツに何度も額を擦り、分かったと示す。

「雨宮、ありがとう」

言葉にかぶりを振る雨宮。

「うっん、ほんとにありがとう」

ね、母さんと心の中で言ってみた。毎日顔を合わせていれば、今の母の笑顔だって想像出来る。わざわざ古い記憶を引っ張り出さなくとも、母さんは笑えるんだ。そして、僕だって。

雨宮が顔を上げる。僕の笑顔に迎えられると、照れながら涙を拭く。

「なんか、泣いたら喉乾いちゃった」

リュックからサイダーを取り出す。水滴の付いたペットボトルにはレシートやガムの包み紙が張り付いていた。雨宮は構わず口に、喉を潤していく。

「南野くんも飲む？」

「とりあえず、底に付いてるゴミを取ってからね」

一度蓋を閉めてレシートを剥がす。すると文字がつつすら移っていた。

「ん？ なに、なに？」

雨宮も一緒になって覗くので、見やすいよう太陽に透かす。

「雨宮、コンビニで何買ったんだ？」

「え？ なんだろ」

残念ながら文字は薄すぎて認識出来ない。ペットボトルを縦にしたり横へ傾けてみても、よく分からなかった。

「でもさ」

「ん？」

雨宮は転がるサイダーを楽しそうに追いかける。

「こうしてるとき、サイダーってキラキラして流れ星みたいだね」

だったら僕は星の欠片を手に行っている事になるんだろうか。じゃ

あ、何を願えばいいだろう。雨宮に聞きたかったが、ロマンチストを気取っていると思われそうだ。

僕は星の欠片をぎゅ、と握る。願い事が浮かぶまで離さないでおこう。

「ねえ、南野くん」

「ん？」

そっとな宮の手が重なる。

「サワガニピース」

雨宮のピースの隙間から太陽が見えた。

26 (後書き)

最後までおつき合い下さり、ありがとうございます。まだエンドマークは付けていませんが、これでステイックサイダーは完結です。

この話は「テレビを付けっぱなしで寝てしまい、気が付くと流れていた深夜ドラマを途中から観てみる」がテーマです。

女性を書くのが苦手で、今回の話で克服出来たらいいなーと思いましたが、課題は増えるばかりです。特に雨宮には苦労しました。それぞれ影はあっても、あえて描かない影を意識したつもりです。ただ、それが描写不足となりストーリーの輪郭をぼやけてしまわせました。これも課題です。

サワガニピースの仕草は個人的に気に入っています。機会があればまた使いたいです。あとステイックサイダーも。

次回作でまたお会い出来る日を信じて。 山田スウェル

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3373w/>

スティックサイダー

2011年11月8日05時14分発行